

# 柏葉健児

—背番号10— (2000年)

市川正孝先生・渡辺三明先生追悼特集号

## 目 次

歴代部長名簿		1
巻頭言		2
野球狂人生	市川 正孝 (S33)	3
（薬局長百人選 IX, 薬事新報社 平成3年1月発行より）		
大同団結なる！	渡辺 三明 (S42)	5
（柏葉健児—背番号9— 昭和61年2月発行より）		
まだ早すぎる	古川 淳 (S25)	6
まだ信じられない	古川 淳 (S25)	7
お二人の想い出	山戸 寿 (S30)	9
故市川正孝教授との想い出	今泉 貴世志 (S31)	9
お世話になった両先生	長田 雅子 (S32)	11
市川正孝氏の想いで		
一青春、野球そして長崎一	西脇 金一郎 (S33)	13
青春の想い出—故市川正孝兄を偲ぶ—	角田 正之 (S33)	14
市川先生を偲んで	工藤 二郎 (S33)	16
市川君、安らかに眠りたまえ	富田 達也 (S33)	19
市川先生・三明先生のこと	高木 康 (S35)	20
市川先輩との出会い		
（あの時は痛かったぜ。市川さん）	大塚 保雄 (S35)	21
渡辺三明先生を悼む	大塚 保雄 (S35)	24
市川先生と渡辺先生を偲んで	永田 了一 (S36)	25
両先生と長薬抜天会・広島支部	橋口 信彦 (S36)	26
市川先生との想い出	吉田 研次 (S37)	28

市川正孝先生とタバコ	左利 龍彦 (S38)	29
市川・渡辺両先生を偲んで	山本 浩三 (S39)	30
三明先生と野球と私	加嶋 奎一 (S45)	32
「三明さん」と「PASSION」	青野 真 (S51)	33
市川先生の想い出、渡辺先生との約束	板倉 忠則 (S51)	34
三明さん・市川先生の想い出 （感謝を込めて）		
回想 一三明先生を偲んで一	高田 充隆 (S52)	35
渡辺投手と市川投手の想い出	松野 康二 (S52)	36
市川先生と渡辺先生の想い出	大木 豊 (S52)	37
渡辺三明先生の想い出	中牟田 弘道 (S53)	38
市川先生と渡辺先生を偲んで	吉田 泰史 (S55)	39
偉大なる両先輩との想い出	中嶋 幹郎 (S57)	40
ソフトボール	宮下 孝志 (S59)	41
渡辺先生との出会いと別れ	松岡 芳樹 (S62)	42
渡辺先生の想い出	池沢 竜平 (S62)	42
渡辺三明先生の想い出	塙崎 雅雄 (S62)	45
渡辺三明先生を偲んで	山田 正紀 (H5)	46
無題	松元 幸平 (H5)	47
渡邊先生との想い出	森本 仁 (H5)	48
三明先生の想い出	千代丸 康重 (H5)	50
医薬品合成化学教室の朝	小畠 滋 (H6)	50
長薬野球部のお二人	吉本 雄祐 (H6)	51
偉大なる先生方との想い出	宗安 正俊 (H7)	52
師匠	赤嶺 (平井) 貴子	
三明先生、市川先生を偲んで	樹田 希 (H7)	53
卒業・就職時お世話になった二人	日宇 宏之 (H7)	54
渡辺三明先生を偲んで	坂本 明夏 (H8)	54
名ノッカー!!	小松 和恵 (H8)	55
私の良き理解者、三明（さんめい）先生	中田 一成 (H9)	56
市川・三明両先生に誓って	平良 文亨 (H9)	58
渡辺三明先生へ感謝の気持ちを込めて	林田 壮一郎 (H9)	59
	日良 国寛 (H10)	60
	長谷 彰子 (H13)	61

編集後記

伊藤 潔 (S59)

長崎大学薬学部野球部同窓会発行

## 長崎大学薬学部野球部歴代部長

吉 村 実	自	昭和 23 年
	至	昭和 35 年
高 畠 英 伍	自	昭和 36 年
	至	昭和 37 年
谷 山 兵 三	自	昭和 38 年
	至	昭和 45 年
小 西 良 士	自	昭和 46 年
	至	昭和 57 年
渡 辺 三 明	自	昭和 58 年
	至	昭和 63 年
古 川 淳	自	平成元年
	至	平成 4 年
伊 藤 潔	自	平成 5 年
	至	現 在

## 長崎大学薬学部校歌（三番）

八波 則吉 作詞

人寿つながる 千古の秘奥  
開かでやまじと四時に貫く  
「柏葉建児」が燃えたつ意氣を  
稲佐ヶ丘の夕陽赤し  
強し 強し 我等が自信

## 卷頭言

吉田俊之（昭和 24 年卒）作

想いを遠く 青雲の彼方に馳せては  
血潮の高鳴りて 頗りなるを  
朝に秀峯雲仙を仰ぎ  
夕に有明湾頭不知火の発する所  
柏樹亭々として碧空に聳え  
風習々として清新の氣 充つ  
伝統の光彩 炳乎として遍し  
嗚呼 清き忍従の三歳の旅よ  
君 聞かずや黎明に乱打する世紀の警鐘を  
余韻嫋々として  
暁闇の静寂を衝いて流るる覚醒の響を  
嗚呼 若き日の感激 ゆきて再び還らず  
三歳の友は忘るるとも

今日の集いの感激は忘るまじ  
起て 柏葉ヶ丘の健男児  
いざや立ちて 宴の庭にひた酔わん  
歌わんかな 歌わんかな 我等が歌

## 野球狂人生

長崎大学医学部教授、附属病院薬剤部長  
昭和33年卒業 市川 正孝

(薬局長百人選 IX (p.17) 薬事新報社 平成3年1月発行より)

昭和九年生まれは、終戦直後アメリカ軍の占領下にあって日本の教育制度が改革され、昭和二十二年小学校卒業と同時に義務教育として新制中学へ入学させられた第一号の年齢に当る。野球が死ぬほど好きで、長崎市立大浦中学校の三星手となり最強のチーム力を誇った。昭和二十四年、長崎県立東高等学校が西九州地区予選（長崎、佐賀、熊本県）で優勝し甲子園へ出場したのが憧れとなり、同校へ進学して硬式野球部へ入部した。幸い、一年次から三星手に抜擢され三年次は遊撃手となり、甲子園を目指して日夜練習に励んだ。先輩には申訳なかったが甲子園への夢は遠く、卒業時に実業団や私立大学からの勧誘もあったが、青春を野球に捧げ燃えつきた抜け殻みたいに一年間頭を冷やして浪人生活を営むことになってしまった。昭和二十九年に長崎大学薬学部へ入学、順調に卒業し、なぜか生化学に興味が湧き大学に残った。生涯野球を止めようと決意した根性はどこへやら野球狂いがまた始まり、長崎大学野球部の主戦投手に返り咲き、実業団チームとして九州各地を転戦した。昭和三十七年に熊本大学薬学部薬剤学教室助手として配置換したとき、やっと野球熱が冷めた。これは師事した一番ヶ瀬尚教授にお願いして行動を伴にしたことによるもので、薬剤部長を併任されたことによって、病院薬剤師に関心をもつききっかけにもなった。

昭和三十九年から四十一年にかけて九州大学薬学部薬品製造工学講座へ内地留学し、酸素異項環のクマリンとニトロフラン誘導体の合成化学分野を研究することとなり、恩師西海技東雄先生に主査をお願いして薬学博士論文を完成することができた（当時三十一才）。

一般家庭に食肉加工製品を保存する冷凍・冷蔵庫が普及しておらず、冷凍食品加工技術の開発が未熟であったため、保存料・食品添加物の研究が盛んで、西海技先生によってニトロフラン誘導体のAF-12がハム・ソーセージ、かまぼこ、豆腐などの保存料として開発された。当時、米国ウイスコンシン大学医学部臨床腫瘍学科のブライアン教授はニトロフラン系化合物の発癌性を研究しており、西海技先生を通じて化学物質の発癌性に関する研究のプロジェクト参加を要請してきた。

昭和四十六年、熊本大学薬学部薬品製造工学講座の助教授になって二年目のときであったが、留学の機会を得てウイスコンシン州マジソン市で生活することになった。

約二年間の研究生活を終えて帰国したが、その後六年を経過してウイスコンシン大学医学部がクリニカルサイエンスセンターとして医学教育、大学病院及び臨床癌センターを統合し新医療体制を組織化した際、臨床癌センターの人体腫瘍学科客員教授のポストに招請された。再度、アメリカで生活することになったが、長女が高等学校を卒業した年でウイスコンシン大学へ入学し、さらにエッジウッドカレッジにも席を置き、教育学を専攻して卒業、教員資格を取得した。これでアメリカの生活が定着できるよう思えたが、丁度九州大学薬学部長井口定男教授が福山大学に薬学部を創設する努力をされているときで、そのお手伝いをする機会を頂いた。

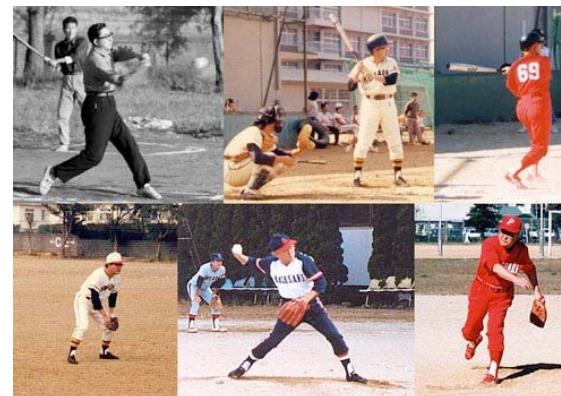
昭和五十七年薬学部創立とともに生物薬学科医薬品化学担当教授に就任し、医療薬学を指向した教育が開始された。まだ未完成の研究室、実習室、視聴覚教室、女子寮建設など、施工に追われる日々であったが、その間隙を縫って福山大学硬式野球部部長を引受け、主に経済学部や工学部で選手養成を行い、全国大学選手権へ向けて練習に励んだ。幸い、中国・四国地区で優勝し代表権を獲得して全国へ名を馳せること二度におよび、薬学部女子学生を応援のチアガールに仕立てて明治神宮球場へ出場したのは何よりの思い出である。

昭和六十年、福山大学薬学部設立が、まだ完成していない時に、長崎大学医学部・薬剤部教授設置の初代教授候補になってしまった。各方面に御迷惑をかけ、お詫びの気持ちで一杯だったが、現職に就任することが決定し、未練を残しながら福山大学を退職させていただいた（当時五十一才）。教授職の他に薬剤部長を併任すると、外国で研究することが大変不便になる。ウイスコンシン大学臨床癌センターの客員教授を引受け以来、福山大学時代も併任してきましたが、ウイスコンシン大学へ海外出張しなければならないが、三ヶ月未満に制限されました。切角の機会なので、長崎大学医学部附属病院薬剤部から薬剤師を招き、ウイスコンシン大学病院でクリニカルファーマシーの研修を三週間（有給休暇を使用）受けさせることにした。語学力に難点はあるが、用時助けることでトレーニングに耐え貴重な体験をしているようである。

九州・山口地区国立大学病院薬剤部対抗ソフトボール大会が毎年開催されているが、わが長崎大学病院薬剤部は優勝の経験がなかった。ここで、また野球狂いが目を覚まし、まずピッチャーを養成、打力チーム指導を行い、昭和六十年薬剤部長就任時から四年連続優勝の偉業を成し遂げた。

### 略歴

昭和三十三年三月	長崎大学薬学部卒業
昭和四十四年十月	熊本大学薬学部助教授
昭和五十七年四月	福山大学薬学部教授
昭和五十四年十一月	ウイスコンシン大学臨床癌センター客員教授併任
昭和六十年四月	長崎大学医学部教授・薬剤部長併任



写真上左より  
熊薬助手時代のソフトボール  
(1964)  
O B 戦・打者=市川 (1979)  
O B 戦・打者=市川 (1996)

下左より  
O B 戦・市川三塁手 (1979)  
O B 戦・市川投手 (1985)  
O B 戦・市川投手 (1996)

## 大同団結なる！

長崎大学薬学部野球部

部長 渡辺 三明（昭和42年卒）

（柏葉健児一背番号9— 昭和61年2月発行より）

春風心地よい、この頃です。同窓生の皆様には、ますますご健勝でご活躍のこととお喜び申し上げます。

昭和45年に一時中断していた野球部同窓会が復活し、さらに昭和48年より会誌柏葉健児が発行され、同窓生相互の絆をより強固にしてまいりました。この16年間の流れの中にあって、先輩後輩の信頼関係を築きつつも、常に、私達の先達への憧憬に似た『想い』が拡がっていたことも確かであります。昭和51年の背番号3から始まった、この私達の望みが60年度のOB会で一気にかなえられたことは大変嬉しいことありました。昨年11月のOB会には、森田稔、江頭文昭両先輩のご尽力により10人の野球部小野島会の大先輩を同じテーブルにお迎えでき、さらには、9年卒の野口繁一、11年卒の隈治人両先達をまじえ、現役部員を合わせ74人が親しく歓談し、痛飲したこと、実に愉快なひと時がありました。この時ほど、先輩後輩の年齢を超えた、『野球をしていた』『野球が好きだった』という共通項によって結びついた同窓会の気持ちの良さに、私達は野球部に籍をおいていた幸を感じたことはありませんでした。

さらに、この席で、本同窓会の目標であります、相互の信頼を培うこと、後輩部員への財政的援助の課題が持ち上がり、即座に小野島会より援助金の発案があり、本年1月17日に金31万円が野球部の基金として贈呈されましたこと、誠に有難く感謝いたしております。

大同団結なる！ この言葉のすがすがしい響きを、私達は大切にし、さらに部、同窓会の発展のために力を注ぐ決意であります。



OB戦（昭和60年）  
小野島時代の先輩と



写真左上 同窓会長、副会長のツーショット（1997年），左下 平成8年のOB戦、試合前の記念撮影時のお二人、右 平成8年のOB戦のベンチ風景（左より市川、渡辺、西脇）

## まだ早すぎる

昭和25年卒業 古川 淳

「古川さん、打ってみる？」 40年程前の昭和町校舎の広いグラウンド。グローブのなかのボールを弄びながら生化学教室の市川助手はニコヤカナ顔をして言った。

「よーし、目が覚めるようなヒットを」と細腕をさすった。当時、私は薬化学教室の助手であり、はやりの薬学部ソフトボールチームの名？レフトであった。

そしてプレイ、速い内角球にのけぞった。曲がるわ、落ちるわ、ホップするやら、10球をすべて空振りしてしまった。

その後、市川先生は、熊本大学ついで福山大学へ転任され、研究、教育に専念された。その間にはアメリカ、ウィスコンシン大学臨床癌センターの客員教授として発癌機構について研究された。主な研究は、植物に広く分布しているクエルセチンのようなフラボノイド類の突然変異性をもつ化合物の化学構造と発癌性の関連性についてと聞いていた。

昭和60年、福山大学薬学部教授だった市川先生は医学部附属病院率剤部長に就任され

た。医学部の期待は勿論のこと、医療薬学を標榜し、大学院を充実したい薬学部にとっても得難い協力者であり、指導者であった。薬学の合成系の分野を専攻された市川先生にとつて薬剤部長職につくことは相当な決心が必要だったろうし、その職務を遂行することは大変なご苦労があったと想像された。しかし、持ち前のバイタリティーを駆使し、広い視野をもって薬剤部の運営に当たり、また医学部教授として医学部さらには大学の運営に関与されていた。一方では、病院薬剤師会そして県薬剤師会の魅力ある指導者として活躍されていたのは衆知のことである。

昨年、市川先生は日本病院薬剤師会賞を受賞された。そのお祝いの席で私は先生のご活躍に心からの祝意を述べた。

それから、日ならずして先生の入院を知らされた。闘病も一時は順調に回復の方向だと聞いて安心していた。

1月8日、告別式で弔辞を捧げられた全田浩日病薬会長は、悲痛な面持ちで

『市川先生！あまりにも早いよ』

と絶句された。この言葉は、私のみならず参会した多くの人々の心に深く残されていることだろう。

平成12年9月

### まだ信じられない

昭和25年卒業 古川 淳

ようやく、秋風の到来、さわやかな日々が続くようになった。この時期になると薬学部に在籍していた昔の事などあれこれと思い出すこともある。学会の準備、教室旅行の温泉巡り、そして野球部OB会などなど。そこには、いつもにこやかな表情でかつ、積極的に事に対処する渡辺先生（三明さんと呼んだほうが親しみやすい）の姿があった。おもえば三明さんは長い付き合いであった。その流れのなかで、何という運命のいたずらだろう、2月25日明け方の悲報は、まさに晴天の霹靂、信じたくない、知りたくない知らせであった。

三明さんは、学生時代、野球部は勿論のことワンダーフォーゲル部にも属していた。おそらく彼がリーダーだったろう、薬学部の長崎一雲仙夜行軍はしんどいものだった。昭和40年代前半は、全国各地の大学で激しい学園紛争が巻き起こり、その頂点に立った事件が東大安田講堂の攻防戦だった。長崎大学も例にもれず火炎瓶が飛び交い、教養部などの封鎖が続いた。大学内にあっても学生間あるいは学生一教職員の間に相互不信の暗雲が漂い殺伐とした雰囲気であった。このような異常な状態を少しでも解消し、学部内の人間的な触れ合いを取り戻そうと始められたのが、薬学部合宿研修であった。

この研修は昭和46年（1971年）より、平成2年（1990年）まで20年間、学部最大のイベントとして続けられた。そして研修に参加した多くの学生諸君には様々な思い出を提供したであろう。長い期間、中心になってこの研修を企画し、指導し、実行したのは三明さんであり、三明さんなしには合宿研修は語れない。



写真上 平成6年野球部OB会懇親会、写真下 同懇親会翌日の親睦試合前の記念撮影

一方、野球部同窓会の復活、秋のOB一現役戦、野球部同窓会報『柏葉健児』の発行など、すべてに中心的役割を果たし、精力的に事を運ぶ裁量は見事であった。

とくに『枯葉健児』の発行にあたっては、薬専小野島時代の先輩にも声をかけ、老骨に鞭を打たせ、貴重な懐古の寄稿文が掲載された。これを読んだ多くの先輩方より感謝の気持ちが届けられたのは何より嬉しいことだった。

三明さんは、学位を得てから、カナダ、ウォータールー大学のスニーカス教授の研究室に留学し、当時、新しい合成手法のリチエーション（リチウム化）反応を改良、応用して、多くの天然化合物の合成に成功して、学会から大いに注目されていた。常日頃、三明さんは、野球以上に研究の厳しさを教えて学生の研究、指導に対処していた。私にとっても大いに見習うべきことであった。留学先であったスニーカス教授は、三明さんの突然の訃報に驚き、その死去を心から悼み、佳子夫人宛て丁重な弔辞が寄せられた。

私たち長薬同窓会員としては、1月6日、会長の市川先生を失い、14日には、元会長の伊藤好古先生、そして、2月25日には副会長の三明先生をたて続けに失うことになった。こんなことがあるだろうかと世の無常を強く思い知られ、いまだ信じられない日々である。

平成12年9月 記

## お二人の想い出

昭和30年卒業 山戸 寿

市川正孝先生とは平成7年1月菊谷元資先生の叙勲祝賀会の席上でお会いしたのが初めてでした。

渡辺三明先生とは昭和50年頃社用で長崎に出張した際、教室にお邪魔して野球部の年会費をお渡ししたのが初めてでした。

両先生とはその後、長薬同窓会総会や近畿支部総会なので薬学部の近況をお聴かせ頂いたり、懇談したりしました。特に昨年大阪での総会後の二次会・野球部同窓会では大いに盛り上がり、両先生ともお元気だったのに急逝されたこと信じられず断腸の思いです。謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

## 故市川正孝教授との想い出

昭和31年卒業 佐世保市 今泉 貴世志

謹んで故市川正孝先生の靈に哀悼の辞をささげます。

長薬野球部同窓会にとっても本当に惜しい人を亡くしました。

平成11年9月4日の午前中「市川先生が入院されました。然もむつかしい病気の様ですよ」との電話を貰い驚き、すぐに大学病院の薬剤部へ電話をしましたが、未だはっきりした事は分からぬとの返事で非常に心配したものです。9月14日に病院を訪れましたが面会謝絶との事で逢えず佐々木・小笠原両副薬剤部長より、入院以来の毎日毎日の病状と治療の経過をくわしく説明受けました。今の医療の最高の療法をされたと思いますが10月・11月と大分快方に向かわれ、今年の3月19日には退官記念パーティまで企画されていた様ですが、それも中止になり誠に残念です。あまりにも早かったと思います。

私と市川君との出逢いは45年前、昭和30年4月にさか昇ります。長大薬学部野球部に私が4年生、市川君が2年生の時で大村の教養部を2年過ごして本学部へは入ってきた時です。長崎東高校が甲子園へ挑戦した時の素晴らしい内野手が今度薬学部へ入学したと云う噂は長崎の本学部においても伝わってきました。後から決勝戦で敗れて甲子園へ



学生時代 合成の教室 昭和32年?倉石助教授をはさんで実習中  
今泉卒後2年目で学校でぶらぶらしていた時お邪魔する。市川君、  
角田正之君、西脇金一郎君、恒見昭男君

はあと一步だったのが眞実の様ですが、その素質と技量は超一流でした。お蔭で4年生の私はそれ迄ショートをしていましたがショートのポジションをゆずり、ピッチャーしたり、ファーストをしたりの有様でした。佐賀県薬会長の江口さんの後のポストをやっと確保したとこでしたのに。熊本大学薬学部との定期戦や長崎大学の学部対抗戦のために、当時の私は昼の明るいうちには有機合成や薬学の追求よりも、野球オンリーの学生生活だったと想い出されます。昭和31年に卒業しても、もう少し勉強をしなさいと当時の高取治輔教授の御自宅に居候させられて、研修生として一年半ばかり学校にお世話になりましたが、市川君や九葉の元常務だった西脇金一郎君やシオノギ福岡支店学術部長だった角田正之君達が真面目に分析や合成の実験をしているのを呼び出して、グラウンドでフリーバッティングをしたものです。彼等もよく私につきあってくれたものです。

夜は夜で昼間汗をかいしているのでアルコールのピッチがあがり、連日連夜、銅座、観光通り、ハーモニカ横丁とくり出したものです。今はあまり名前を聞きませんが、50円のハイボールの全盛時代で、サントリーバーとトリスバー(ウミノ)の二軒位しかなく、後は女性がいるサロンとキャバレー銀馬車位でした。2時、3時が当たり前で翌日は私はゆっくり良かったが、彼等は講義があるので大変だったと思います。すまぬ事をしたと後悔しました。

市川君はそれから卒業後、一番ヶ瀬教授の下で熊本大学薬学部、ウイスコンシン大学、福山大学と我々とブランクがありますが15、6年前長崎大医学部教授として戻ってきてから又付き合いが始まりました。早速、長薬野球部OB会にも出席するし、当然、長崎で佐世保でと夜のつき合いも復活しました。佐世保でソフトボールのチームを私の会社の男子連中と作って呼んだり、電話をかければ心よく引き受けて出席して呉れました。当然、其の夜は2次会、3次会とクラブめぐりです。佐世保の美人のママさんにも人気があり、連れて行った私は影がうすかった様です。



日本病院薬学賞受賞祝賀会 1999年7月31日  
市川御夫妻、渡辺三明先生とともに (ニュー長崎ホテル)

ソフトボールばかりでなく、私の会社の薬剤師の皆さんにも時々佐世保に呼んで、長大病院の院外処方箋発行の影響や薬剤師の職能向上の講義等をして貰いました。思えば昨年のお盆の直前の8月10日に高木会長・西脇野球部同窓会長・渡辺三明助教授らと共に招きして今泉調剤薬局の薬剤師全員と一席もつたのが元気な彼の姿を見たのが最後でした。其の時もいつもど何の変わりもなく呑んで食べて

10人ばかりで2次会のクラブへとくり出しました。12時近くになって私だけ帰ると言つ

たら、めずらしく一緒に帰ると言うので西脇君と2人をホテルへ送りました。10年位前、長崎で呑んだ時、12時頃ホテルへ帰ると言ったら、昔、学生時代、2時3時迄ひっぱつて帰さなかっただけにもう帰るとはなんですかと帰さなかっただ事がありますが、其の時は素直についてきました。今、思えばやっぱり何か異常があったのではないかと悔やみます。翌朝、私の店に挨拶と言って寄ってくれたのが、あの顔色の赤い笑顔が素晴らしい、誰からも愛され、尊敬された市川君の最後の顔でした。長崎県内の何所の薬局でもそうでしょうが、薬剤師不足で困り果て、悩んで頼んだ時も数名の薬剤師を世話して勤務の便宜をはかってくれたし、私の頼み事はよく聞いてくれました。改めて今、感謝の念で一杯です。



野球部同窓会 92年11月14日 浦上江山樓  
左端は江本篤君（昭和31年卒）

大阪地区長葉野球部同窓会 1999年10月23日  
摺南大学薬学部小井田教授、三明さんとともに  
大阪新田辺 友栄にて

やっと面会が出来ると聞き 11月21日に大学病院の病室を訪れ、奥様と3人で30分ばかり話し合い、その時、快方に向かい一つあるとの事で退官記念パーティーの事などを話し合い、又バッヂリ呑もうやと言って帰った事でした。その1週間後位に何か急変した様な連絡をうけ心配しておりましたが、最悪の結果となりました。これからもっともっと元気で長崎県薬剤師会、病院薬剤師会、長葉同窓会、長葉野球部同窓会の為に指導的立場で活躍して貰いたいと思っておりましたが果たせぬ残念の一事です。お残りになられました奥様の則子様や三人の立派に成長されましたお子様達が心落とす事なく幸せにお暮らしになる事を祈りたいと思います。

合掌

（本稿は長崎県薬剤師会雑誌「県薬だより」2000年3月号に掲載されたものです）

## お世話になった両先生

昭和32年卒業 長田 雅子

「うちに寄越していいよ」病葉の理事会で市川先生にこう言われたのは、15年ばかり前のことでした。そのころ私が勤務していた病院は総合病院ではなく、そのため新卒薬剤師の研修ができなかったのでご相談したところ、快く引き受けてくださったのでした。そ

れ以来、新卒薬剤師を採用する度毎に大学病院薬剤部にお世話になってきました。

エネルギー満々で行動力に溢れ、弁舌さわやか、堂々たる体躯、大学病院薬剤部長という押しも押されもしない先生でしたが、高校では同級生、大学では私の一年下ということもあって、気軽に相談できたのですが、とても良くしてくださいました。長崎東高野球部の名ショート時代のスリムでおとなしそうだった頃からは想像もできませんでした。

そして、その新卒薬剤師を送り込んでくださったのが渡辺三明先生でした。地元ということで、ずっと同窓会の役員を務めさせていただいている関係で存じ上げていた三明先生でしたが、長大薬学部創立百周年の際に『薬学部百周年史』の編集委員としていっしょに仕事をしたり、佳子夫人との関係もあって、親しくなりました。そしてなにかにつけて親身になってお世話をくださいました。求人をお願いすると、「いるよ。とっても光っている良い子がいるよ」と、あの人懐っこい声で、お返事をくださったり、本人を車で連れてきてくださったりされました。（もしかすると、その学生には強引に承諾させたのかも知れませんが…）学生や、いろいろな人の面倒見がよく、本当にいっしょにうけめいお世話をされておられました。

三明先生の運転で、佳子夫人や友人たちと外海町へ「うに」や「活いか」を食べに行つたのは昨年の春のことでした。帰りには、遠藤周作の”沈黙の碑”や、出津の教会などを廻って、ほんとうに楽しい一日でした。そしてまた今年も一緒にしたいものと楽しみにしていましたのに。今でも信じられない気持ちです。

市川先生も三明先生も皆より早くこの世を去ってしまいましたが、きっとその分、十分に仕事をし、楽しいお酒を飲み、大勢の人のために活躍し、完全燃焼されたのではないでしょうか。沢山のすばらしい想い出を私たちの胸に残して、今はきっとあの世で二人、大好きなお酒を飲みながら、談笑していらっしゃることと思っています。



熊葉遠征・女性マネージャー初登場  
(昭和30年?)

写真提供：工藤二郎（昭和33年卒）

## 市川正孝氏の思いでー青春、野球そして長崎ー

長薬野球部同窓会会長  
昭和33年卒業 西脇 金一郎

市川氏が亡くなる2ヶ月前の10月下旬、病床見舞を兼ねてインタビューのため大学病院を訪問した。翌年の3月に予定されていた退官記念誌に友人代表として「市川氏の人となり」を書けとの依頼があったためである。その日はご機嫌であった。ベッドサイドの肘掛け椅子に座って約30分間、小生の質問に応じてくれた。静岡県浜松市で生を受け、満州の国民学校で終戦を迎え、引揚げ後、別府市から長崎に落ち着くまでの波瀾のドラマを拝聴した。引き続き中学校・高等学校・大学時代の野球物語を語ってくれた。短い時間であったが、今、思い起こすと、彼も何かを思い出すように話していたのが印象に残っている。その時の話の内容が小生の「友人代表の弔辞」になってしまったとは知る由もなかった。

不思議なものである。今回、原稿執筆依頼があって、たまたま「柏葉健児」の中に資料を探していたところ、1986年版「背番号9」（以降中止している）に市川氏の特別寄稿「青春、野球そして長崎」があった。読んでみると、小生がインタビューで質問し、市川氏が語ってくれた内容が更に詳しく載っているではないか。更に、甲子園に行けなかったことが、今日の市川氏の円満なる人格・栄誉ある業績を築いた事を知り、改めて「青春、野球そして長崎」が彼の人生を運命付けていたのだと気づいた次第である。小生が多くを語るより、彼の以下の言葉を聞いていただきたい。



昭和32年当時の野球部



3番サード市川

「長崎は第二の故郷として青春時代はもとより、昭和21年満州、奉天市から引揚げ、佐古小学校6年生の3学期、大浦中学(第1回生)、長崎東高(第5回生)で学んだ思い出深い地です。昭和25年より1年生3塁手として、長崎東高硬式野球部にデビューしたときから、人生にとって野球が全てとなりました。高校野球での甲子園出場は何にも優る勲章ですが、私の

時代には実現されませんでした。高校2年及び3年生では二代目の歴代遊撃手として日夜練習に励み、プロ野球や実業団野球でのプレーを夢見たこともあります。丁度、セ・パ両リーグがスタートした時期もあり、或程度、野球ができれば誘いの手が伸びてくるような気がして野球に望みを託した時代でもあったと思います。高校3年は野球の内容がチームにとって充実した年でした。九州地区代表決定戦まで勝ち進み9回裏相手チーム(長崎西高)の勝越しランナーを2塁、3塁に置いて三遊間寄りのショートゴロをとうとう一塁へ暴投してしまいました。全て私の責任で代表権は失われました。人生が真っ暗になり、チームメートに詫びる言葉もなく、自殺したい気持ちでした。もう野球は決してやるまいと思いました。三菱造船、大洋漁業や大学からの勧説を断わり浪人生活に入りました。青春から野球が消えたとき本当の自分をよりもどすのに時間がかかり、母の慰めなど全く役に立たなかったほど荒れ狂ったときがありました。今想えば、あの暴投が私の人生を変えてしまったのです。もし博打のような野球に将来を賭けていたら、現在の私は無かったでしょう。

昭和21年7月、母と共に引揚者として日本の地に上陸したとき、故郷を離れ別府に永住を求めたこともあります。当時、別府には駐留米兵と街娼が満ちており、母はいち早く長崎への移住を決意したのです。これも私にとっては、不良への脱落から逃がれた母からのラッキーなプレゼントのように思えてなりません。転ばぬさきの杖が節目にあって、やっと今日の50代になったのかもしれません。（後略）」

最後に小生が弔辞の中で市川氏に捧げた無念の言葉をご紹介して終わります。  
「大学同期の男性軍の中で市川さんほどナンバーワン的素養の多い方は居ません。出席簿の名簿順で一番、男前で一番、結婚も一番早く、海外体験の期間も一番、はしご酒も一番、野球のうまさは勿論1番、肩書きのつく仕事も1番、今日の医薬分業のさきがけを作ったのも1番…、このような1番づくしの市川さんがなにも冥土への旅立ちまで1番で締めくくる必要はなくても良かったのではないかですか。」

合掌

## 青春の思い出ー故市川正孝兄を偲ぶー

昭和33年卒業 角田 正之

ここに一枚の写真がある。私達が大学2年の時、正確には昭和三十年五月、福岡平和台球場で開催された西日本地区大学野球選手権大会に出場した時のものである。当時の長大硬式野球部は各学部より選抜された選手で編成されていて、我が薬学部からは市川、西脇と私の3名が入り、ほかに学芸学部（現教育学部）から3名、医学、水産、経済の各学部から夫々2名がこの大会に出場した。（当時のメンバーは全員で約20名であった。）

チームの実力は当時の九州地区国公立大ではAクラスで、確かこの大会の2回戦で福岡商大（現福岡大）に快心の勝利をおさめたことからしても最強のメンバーであったと自負しています。



昭和30年5月、福岡平和台球場で開催された西日本地区大学野球選手権大会  
前列左から二人目が市川、右から二番目が西脇、後列中央が角田

市川兄は2塁手で2番バッター、西脇さんは外野手、私は一塁手か投手でした。当時の市川二塁手は軽快で堅実な守備で幾度となくピンチを救ってくれたし、打撃ではシャープな打法で左右に打ち分け、チャンスメーカーとして存分な働きをした名手でした。また、薬学部のチームでは三番ショートで私が投手で試合の途中で打ち込まれたピンチに名リリーフをし勝利を勝ち取ったことがしばしばでした。このようにチームは学部対抗戦や熊大との定期戦では殆どの試合で負けたことはなかったと思います。

市川兄と私は全長大、薬学部のチームのメンバーとして4年間共に一緒にプレーをし、勝利の感激と敗北の屈辱を分かちあった得がたい友人でした。私が大学時代から今日までの40有余年の間、市川兄から学び教わったことは数多くありました。特に彼はいつも明るくプラス指向で全てのことを素直に受け止め、日頃からの切磋琢磨の努力をしてチャンスを的確に生かしピンチには辛抱強く冷静に防ぎ、それこそ多くのことをスマートに確実に実行されて大きな成果を上げられていたことを私は教わったと思います。

天地の悠久に比べ、市川兄と共に過ごした年月は寸陰の間かもしれません、彼が生きた65年の人生は並々ならぬ努力をもとに明るく楽しく常に前向きで充実したものであり、このことがあとに残った私共の生き方の指標として永久に輝き続けるものと確信します。

最後にこれまでの御交誼、御指導、友情に対して心からお礼を申上げます。

## 故渡辺三明さんのこと

昭和33年卒業 角田 正之

渡辺さんとは長薬野球部のOB会ではじめて出会い、それから約30年の長い間お世話になっていましたが忽然として幽明境を隔てることになり、ただただ痛恨の極みです。これからもずっと存命で益々OB会などでご指導、ご活躍を願えたものをと天の無常を感じざるを得ません。彼の熱い思いとゆまぬご努力が今日のOB会の発展に大きく寄与したことは偉大であり、彼の意志を私共一人一人が引き継ぎ永遠に不滅のOB会にすべきものと決意しています。

## 市川先生を偲んで

昭和33年卒業 工藤 二郎

市川さんと渡辺さんの想い出を残したいから、写真等をお貸し願いたいとの手紙が野球部から届いた。市川さんの、学生時代の写真なら相当数撮っているので、何とかなろだろうと思ってフィルムを探してみた。

カラー写真はまだ普及していなかった。当時の写真は黒白の要素で何かを表現しなければならない。光と影、その諧調の美しさ、及び構図の面白さが相俟って優れた写真がつくりだされる。市川さんは、これらの要素をすべて備えた人だったと思う。彼が光り輝く人物であったことは誰もが認めている。しかし、その輝きは彼自身が持つ影によって、弥増したように思えてならない。だが彼はその影を人に気付かせることはなかった。

市川さんは、私より一週間早く生まれた。昭和一桁最後の双子座である。共に戦後間もない頃父親を亡くし、母親の手で育てられている。彼が奉天から引揚げて最初に住んだ別府市・野口は、私のホームグラウンドである。環境が似てくると考えも似てくる。言葉に出さなくとも、何かを判り合える友であった。先ずは、晴れがましい舞台にいる市川さんの写真をと思ったが、見つからない。晴れがましくない私が、そんな場所にいる筈がないから仕方がない。そうだ！例外

があった。九連連を結成した

時は一緒に活動した。あの時の写真がいい。当時は熊薬との交流しか無かった。九大も交えた組織を作ろうと、市川さんを中心にして西枝海先生（九大薬・長崎薬兼任教授）を頼って話を進めた。結成式の時、私は流感で高熱を出していたが、愛用の二眼レフで三大学結束の瞬間を撮り



続けた。

市川さんが、その後に九大で勉強し、井口先生を知ったのも何かの縁だろう。彼は出会いを大切にする人であった。その九葉連結成時のフィルムが一枚もない。どうやら、関係者に貸したままになっているらしい。野球部からの写真要請にはCD-Rで渡そう。返却不要。便利な世の中になったものだ。

市川さんは秀でたスポーツマンである。奉天ではスケーターとして、帰国後は陸上スプリンターとして、そして中学時代から野球の名手として名をあげてきたと聞いている。長崎東高では一年生からレギュラーを張ったという。私も野球が好きだから、一年生の時から応援に行った（大分県の山峡の高校・・連戦連敗で廃部となった）。一度ユニフォームを着て球投げをしてみたいとの念願が適ったのは薬学の二年になってから。今泉先輩が四年生で、球拾いをしろということで入部させて貰った。初めてグランドに出た時に驚いた。市川さんの送球が曲がってきて捕球出来ないのである。右へ・左へと予測もつかない、切れの良い変化球をスピード豊かに投げてくる。練習試合で市川遊撃手からの一塁送球を顔で受けたことがある。確信をもつて出したファーストミットの横から突然ボールが現れ、顔面を直撃した。私の顔が変形したのは、そのせいだと思っている。

市川さんは太洋漁業や三菱造船から声が掛かるほどの遊撃手であった。軽快なフットワークと球捌きは流石と唸らせるものがあったが、恐怖の送球だけは何とかして欲しかった。捕球すると殆どステップせずに、スナップを効かせてピュッと投げたボールが突然曲がりだす夢を、今でも見る事がある。彼のバッティングも一流だった。殆どの試合は一番・西脇、三番・市川、四番・角田の打順が組まれていたと記憶する。西脇会長は選球眼の良さと走塁の上手さが際立っていたし、角田さんの長打力は天性のものがあった。しかし中距離打者の市川さんには確実性という大きな武器があつて、抜群の信頼性を誇る中心打者であった。



ユニフォームの着こなしも上手かつたが、普段もお洒落だった。彼の家の近くに長谷川シャツという専門店があり、夜の遊び着はここで眺めて作った。私も付き合って作ったが、同じような物を着ていても、彼だけがモテテいたような気がしてならない。

「昭和32年度学友会予算書」が手元にある。褐色に変色したB4判の紙2枚にガリ版刷りでぎっしり書

き込まれている。体育部活動費総額4万200円を野球班・籠球班・山岳班・庭球班・卓球班で取り合っている。野球班代表者は市川さんで、爽やかな弁舌と対外試合の実績を武器に16950円をゲット、もちろん最高額である。内訳は ボール2打3600円・バット15本6750円・グローブ4600円・キャッチヤメン2000円となっている。文化部活動費は2万3000円で写真班・映画班・音楽班・新聞班・文芸班で取り合って、私が代表の写

真班が最高額の6000円を獲得している。特別奨学金3000円の時代である。

当時、殆どの野球部員は熊本遠征を楽しみにしていた。伝説となっている「文化劇場」・味噌天神にあった居酒屋「紫煙」・鶴屋の近くにあったキャバレー「黄金の腕」・デートには喫茶「山小屋」など楽しい場所が沢山あった。その熊大薬学部に市川さんが転出したのは昭和37年である。その二年後に、私も会社の命で熊本に赴任して、新築されたばかりの市川邸から数分の所に家を借りた。その時、初めて市川夫人・則子さんにお会いしたが、スラリとした美人で、何故かホッとしたことを覚えている。厳格な「おばあちゃん」(市川さんの母親を我々はオバアチャンと呼んでいた)も元気で、私の妻や子は勿論、偶にやってくる女房の母親もいろいろと人生の教えを受けた。

昭和41年、市川さんが熊大薬学部助教授になられた年に、角田さん、西脇さんも集まって熊本で遊んだことがある。阿蘇・湯之谷のゴルフ場でプレイしたが、当時ゴルフをしなかった市川さんも一緒に回って写真を撮ってくれた。それを自ら暗室に入り、四つ切に伸ばしてくれた。今も大事にしている。昭和57年、福山大学に薬学部が開設され、教授として招聘される。医療薬学の道を模索する傍ら野球部を指導し、全国学生軟式野球選手権大会に2度出場している。昭和60年、長崎大学医学部教授として帰って来てからの活躍は、ご承知の通りです。

平成12年8月18日、長崎自動車道・川登PAでバッタリお会いした。盆休みを終えて、昼からの教授会に出席すべく、帰路を急がれているところであった。顔色もよく、「退官後はしばらく静養するつもり、それを楽しみにしている。」と語っていた。横にいた奥さんが嬉しそうに笑った。西脇さんから「8月31日、市川さんが緊急入院された。」とEメールが入った時は信じられなかった。何一つ病気したことのない人、十日前はあんなに元気だった人が何故？

入院中、一度だけお見舞いする事ができた。枕元の机上に赤い野球帽があった。



平成5年野球部OB会  
親睦試合前の記念撮影  
中央の赤い帽子が市川教  
授、右隣の白いユニフォー  
ムは昭和9年卒業の野口  
繁一先輩。試合で2人は  
バッテリーを組んだ。

## 市川君、安らかに眠りたまえ

昭和33年卒業 富田 達也

今、君との若いときを思い出しています。

高血圧、糖尿病、動脈硬化の進展と典型的な成人病を持つ我が身が、まさか、あの元気者、市川君の追悼文を書くことになるとは、夢想だにしなかったことである。

彼との接点は、やはり野球である。昭和33年卒の我が同級生には市川、角田、西脇という高校時代に甲子園を目指して、本格的に野球に取り組んだ名手が居た。私は草野球ながら、中学、高校と6年間、夢中になって野球を楽しんだ経験があり、彼等3人の勧誘で野球部に入り以来3年間野球を中心としたつき合いがはじまった。

2年生の夏、初の対外試合、熊薬との定期戦のこと。オール長崎大のメンバーでもあつた彼等3人は当然最初から、レギュラーで中心選手である。私は実力未知数でベンチに居た。試合後半チャンス到来、代打に起用された私の打球は右中間をライナーで破る2塁打となり、2塁走者市川君を生還させることになった。以後、メンバーが卒業まで定着した。

1番レフト西脇、3番ショート市川、4番ピッチャー角田、6番セカンド富田、彼等3人が主力であった3年間、ほとんど負けた記憶がない。まず投手力が万全であったこと。先発、角田投手は、豪速球が売りもので、3振の山を築いたが、疲れるので終盤では四球を連発するくせがあった。そこで、最終回は、市川投手の登場となりよくコントロールされた大きなカーブとキレのよい速球で試合をしめくったものである。守備力も、堅実なレフト西脇、華麗なフットワークで広い守備範囲のショート市川の存在があり、ますますだったと思う。一度だけだが、ショート市川の早い捕球からトスで、6、4、3の併殺を完成了記憶がある。打つ方でも、彼等3人が抜けた存在であり、私の打席では、西脇、市川、角田の中1人か2人は、累々に居することになるが、熊薬との初打席以外殆どヒットを打った記憶がないのは残念である。



1955年6月 熊本遠征 宿舎にて  
2年生野球部員 後列（左から）工藤、恒見、市川、角田、前列 西脇、富田

野球以外に市川君と私との間には2人だけの接点がある。熊本に2回、博多に1回対抗試合の度、遠征したが、2人で、こっそり宿舎を抜け出し、ストリップショウや赤線で遊んだ。夜半、もしくは、朝早く宿舎に戻り、何食わぬ顔で沈黙を守ったのは、2人の暗

黙の了解事項であった。

最後に彼に会ったのは昨年春の甫陵会だったと思う。酒をぐみかわす喧嘩の中で、彼と2人きりの瞬間があった。

「俺も、早く、トミさんのように気楽になりたいヨ」

ふともらした彼の言葉は、きっと本音だったと思う。因みに私は60才で定年を迎え、気楽な晩年をエンジョイしている。忙しく、走りに走った過去の40年にくらべると、黄金の日々である。せめて退官後の数年、彼にも気楽な日々を送らせてやりたかった。

市川君よ、安らかに眠りたまえ

私から送る言葉はこれだけである。

## 市川先生・三明先生のこと

昭和35年卒業 高木 康

長薬野球部OB会、長薬同窓会にとってメモリアル・イヤーは大変な幕明けとなりました。1月6日、市川正孝先生の訃報に続いて、2月26日、渡辺三明先生の急逝の報が届きました。両先生はOB会、長薬同窓会の中心であり、特に長薬同窓会は会長、副会長を失い両手をもぎ取られた状態になってしまいました。幸い各々の協力の下、順調に両会とも運営されていることに、2人とも一安心でしょう。両先生の想い出は尽きませんが、少し記させていただきます。

市川正孝先生は高校、大学と私の2年先輩で、薬学部では生化学教室で教官と悪魔鬼学生として指導を受けたのですが、先生と言うよりは年の差も少なく“美味しいお酒を振舞ってくれる兄貴”という感じでした。元々私が2年に進学した時、野球部の欠員補充で「熊本へ酒を飲みに連れて行ってあげるから野球部に入りなさい」と誘われて始まった付き合いでしたから、市川先生にお酒をご馳走になるのは当然のこと、市川先生の給料日には唯々先生の帰りを待つというのが私達（悪魔鬼酒飲み4年生は5人いたのです）の常でした。市川先生にとって迷惑な悪魔鬼だったと思いますが、そんなことは全く意に介さない、という本当に良い兄貴でした。社会に出てからもお会いした席の殆どに酒があり、楽しい有意義な酒をご馳走になりました。

想えば、長大病院院外処方箋発行の切っ掛けも酒の席でした。本年も11月大分県別府市で第64回九州山口薬学大会が開催されますが、前回平成3年別府市での九山大会の折り、別府の寂れたスタンドバーで市川先生を囲んで長崎市薬剤師会の当時は若い血氣盛んな3人の薬剤師との酒席での事でした。当時の学会のメインテーマは“医薬分業推進”でしたが、私達は酔うほどに元気に、と言うより横着になり、市川先生に「長大も早く院外処方箋発行を」と迫ったのです。最初はニコニコ笑って受け答えをしていた市川先生も、遂に「お前等の様なボンクラ頭ではないのだから俺はちゃんと考えているのだ！」と怒鳴られ驚きました。既に先生は長崎市全域の薬局を対象にした面分業の設計を立ておられたのです。平成3年11月21日、「話があるから病院まで出て来なさい」と呼び出され教授室へ行くと「12月から小児の専門外来の院外処方箋を発行するので長崎市薬剤師会

で応需体制をしっかりとやりなさい」との命を受けました。当時は複雑な広域病院の処方箋への対応は殆ど薬局が出来ていなかったので不安でしたが、別府でのこともあり断わる訳にはいきません。其処で原田均先生に相談し、先ず小児科の処方についての講習会をはじめ、調剤講習会を開催して備えました。12月17日から長大病院の院外処方箋発行を実施し、次いで平成4年2月から全国に先駆けて全面院外処方箋発行へと移行し今日に至っているのです。

長大病院の院外処方箋発行は分業を大きく前進させたばかりでなく、各薬局間の相互理解、病院薬剤師と開局薬剤師との病薬連携、開業医、患者からの評価、勉学意欲の高揚等々、薬剤師、薬剤師会に対しての市川先生の功績は計り知れないものがあります。

渡辺三明先生とは野球部OB会でのお付き合いが始まり、以後良く研究室へも伺いました。無邪気そのもの、そんな中に気配りの細やかな、というのが私の印象です。好んで“世話好き”と言われるために人の世話をした訳ではなかったでしょうが本当に私もお世話になりました。思えば人に任せせず何でも一人で背負い込む世話好きな性格が荷重な仕事量となり残念な結果になってしまったのでは、と悔やまれます。

いろいろとお世話になりましたが、中でも佳子先生を薬剤師会へ出して頂いたことには今でも感謝しています。昭和45年の事です。当時の長崎市薬剤師会会长、宮崎長二先生から、情報センターを創るから人を探すように、との命を受けました。その頃は唯一、九州大学薬学部に情報センターがあり、早速見学に行きました。今後大変重要な仕事になっていくだろうとは解ったのですが、さてこの仕事を請負ってくれる優秀な才能を持った薬剤師で貧乏な薬剤師会へ来てくれる人が居るのかと考えていると、頭にヒラメキました。カナダから帰国した三明先生の奥様です。薬学部の三明先生の所へ行き相談したところ、佳子先生に引き受けて頂けることになりました。形の無いところから苦労を重ね、今では県薬剤師会の中枢となった“医薬品情報センター”は佳子先生のご尽力と三明先生のご理解のお蔭と感謝しています。

大半の方が三明先生を“サンメイ先生”と呼んでいたと思いますが、私もずっと“サンメイ先生”と呼ばせて頂きました。それに呼応して、と言う訳ではないのでしょうか、三明先生は私のことを“タカギコウさん”と呼んでいました。遂に最後まで“ヤスシ”とは呼んで頂けませんでした。

二人して今日もヘネシーを酌み交わしていることと思います。 献杯！

### 市川先輩との出会い（あの時は痛かったぜ。市川さん）

昭和35年卒業 大塚 保雄  
(元遊撃手・三塁手)

市川教授いや市川先生（やっぱり44年タイムスリップして）市川さんと呼ばせて下さい。野球を通じて市川さんを知ったのは、私が教養学部から学部に進んだ昭和31年の春だった。私にとっては、ショッキングでもあり また痛い思い出もある。中原氏、北島

氏と共に野球部に入部し、午後練に参加した初日の事であった。『お前どこが守れるや?』『内野なら どこでも』『ならショートに入れ』のやりとりがあって、私はショートを守り、シートバッティングが始まった。

私の野球歴？ 小学校；ピッチャー、中学校；ショート それだけ。それも福岡学芸大学（現 福岡教育大）付属小・付属中という弱小校である。高校は小倉高校一当時の甲子園常連校一だったが、野球部には入れなかった。しかし大学受験に失敗してみると 時間だけは十分にあり、天気の良い土・日曜は殆ど草野球に明け暮れた。当時ゲーセンは勿論ボーリングも未だなかった。しかし野球は盛んで北九州でも門司鉄道管理局、通称 門鉄や八幡製鉄などの実業団が全国レベルであった。遊びは大人も子供も 野球と決まっていた。サッカーなど、部活で持つ中学は北九州でたった2校しかなかった時代である。高校野球くずれや会社の野球同好会の大人に交じって、結構強かった地元青年団のチームに属し、今では考えられないがトラックの荷台に乗って移動していた記憶がある。それだけに、大向こうを意識した派手なプレー、勝つための小細工、トリックプレーの得意なチームだった。

シートバッティングが始まったが、初めて手にしたトップボール・準硬式ボールにと惑つてボロボロしていたら、打ち損なったファールフライがフラフラとレフト線にまい上がった。瞬間 これはサードは捕れない。ましてレフトの西脇さんは絶対追いつけまい。ヨッシャ

ここで巧いところを見せてやれ と『もらった。任せ 任せ』と怒鳴って走った。ここは得意なコース、まともに捕っては面白くも何ともない とボールの落下点を通りすぎてヒヨイとグラブを回して背中で捕って見せた。何時もあれば ここで『ウォー』の感嘆詞と拍手がくるところである。ところが その日は違った。『ウォー』の前にガーンと一発殴られてしまった。殴ったのが市川三塁手だった。『オオ サードここまで来たかいい足してるナ。落としたわけじゃないのに何故？。まして試合じゃなく練習じゃない』ムツとした顔をしていただろう私に『そんなスタンドプレーするな！。まともに捕れ！』と怒鳴った。 びっくりした。

知らなかったのは、私だけだったらしい。市川三塁手はキャピキャビの高校球児だったので。『足速いじゃん』と感心するのもおこがましい事なのだ。まじめな高校野球は別格だと認識は私にもあった。長崎東の3年の夏九州地区代表決定戦で市川さんのエラーでサヨナラ負けしたことはあとで知った。

（柏葉 健児・背番号-9-（1986年）p5 「青春、野球そして長崎」市川教授の特別寄稿に詳しい）

真摯な姿勢は野球だけではなかった、学問においても奥義を究め、熊本大学、福山大学ウイスコンシン大学を経て昭和60年長崎大学医学部教授・付属病院薬剤部長に就任されたことは本学の誇りであり、また、共に白球を追ったチームメートひいては薬学部野球部の希望の星でもあった。

公私共に忙しい市川教授とゆっくり話しをしたのは まだ私が北九州市立八幡病院薬局長の頃 北九州市も院外処方箋発行の機運があり、当時既に院外処方発行に踏み切っていた長崎大学付属病院の状況を伺いに行った折り、市川教授ご夫妻と愚妻で飲茶を食べながら

ら、熊本時代の話やヨーロッパやウイスコンシン当時の話など聞かせていただいた。気さくな奥様も『ねーお父さん ねーお父さん』と市川教授に話されて非常に楽しい時を過ごさせて頂き、愚妻も一挙に奥様のファンになってしまった。市川教授も照れ臭かったのだろう、やけにメガネをふきふき笑っておられたのが目に浮かぶ。前夜高木康氏（35年卒）と3人で深更まで長崎の夜を満喫したので、酒の弱い私はアプアブの状態なのに 次々と出される料理をたいらげる市川教授の健啖ぶりに驚いた。博多で開かれるメーカーの研究会や病院薬剤師の研修会などで、座長や講演をされる市川教授に何度もお会いする機会があったが、私を見つけて『オイ元気にしとッヤ奥さんも元気？』と声をかけて下さった、教授 市川さん今はなし。

『あのときは痛かったぜ。市川さん。でも有り難うございました。』 合掌。

2000年9月22日



市川教授就任 10 周年記念  
(1994.10.2)  
野球部の面々と 右から辻、今泉、  
市川、工藤、富田、大塚

市川教授就任 10 周年記念  
(1994.10.2)  
市川先生を囲んで桑山君と大塚

## 渡辺三明先生を悼む

昭和35年卒業 大塚 保雄

長い間 薬学部野球部同窓会のお世話をありがとうございました。

野球部同窓会の連絡があるとそれからバッティングセンターに通っていましたと長崎に行っていたのはもう何十年前になるかなー○昭和町のグラウンドには2回行った記憶がある。内儀さんと行ったり、子供を連れていったり、1年1回の家族旅行のような時もあった。三明さんに初めて会ったのは増田和久君（昭和50年卒業年卒・現小倉記念病院薬局長）が4年生の秋だったから昭和49年である。まだまだ三明さんも若くショートを守り途中から あの独特のスリークォーターから変化球を繰り出していた記憶がある。OB 対現役の試合の時は何時でも口八丁手八丁と言うより口八丁口八丁のOB軍をまとめて『エー打順を発表します。卒業年次順に行きます。1番ファースト今泉 2番セカンド工藤 3番ピッチャー市川 4番サード大塚 5番ライト吉田研 6番ショート渡辺 7番キャッチャー笠田 8番センター吉田泰 9番レフト上島以上』昭和60年のOB軍の先発メンバー。卒業年次とは 三明さん大変ですね。

平成10年北九州地区の長薬同窓会が小倉で開かれ、渡辺三明先生は同窓会副会長として遠路北九州まで出張って頂き「大変な時期にかかっている大学の現状について」話して頂きました。どこの同窓会も若い方の参加が少ないと嘆いている中、近来まれに見る若い方々の集まりを得て非常に盛会で、幹事の一人として胸をなでおろしました。後刻渡辺先生よりご丁寧な礼状と記念のタイピンを頂いたが、あの踊るような個性ある筆跡も、もう見ることもできない。

今年1月市川教授の葬儀のおり、北九州からやって来た私を目ざとく見つけて、席に案内して下さった 三明さん。平成12年北九州市立病院、北九州病院と2度目の定年をむかえて40年使った心身をリフレッシュしようと、内儀さんと旅行中大阪で、北九州総合病院薬局大石君（H7年卒・野球部）より渡辺三明先生の訃報を受けた。にわかには信じがたくそのまま長崎へ直行。列車の中で 古川 淳先生にお会いして詳しく話して頂いた。1月に市川教授を失い 今まで渡辺助教授も・・・・野球部も、同窓会もリーダーシップを持つ得難い人材を一気に失ってしまった。涙をそそったのは『市川正孝先生を偲ぶ会』の案内状を受け取ったが、発起人の最後に渡辺 三明の名前を見た時であった。

『三明さん市川さんと天国でゆっくり野球の話でもして下さい』合掌

2000年9月22日

## 市川先生と渡辺先生を偲んで

昭和36年卒業 永田 了一

市川正孝、波辺三明両先生のご冥福をお祈り申し上げます。

野球が縁で両先生と接する機会ができたわけですが、最初に市川先生を存じ上げたのは野球に於てではもちろんありません。それは教養の一年の時、講義が始まる前、勇ましく年輩の学生が三人教室に入ってこられました。その中の一人が市川先生でした。他のお二人は現在野球部OBの西脇、角田両先生でした。この時が市川先生との最初の接点といえば接点です。当時先生方は専門の四年生で、薬学部のバッジを我々に紹介に見えられました。長崎大学のマークは帆船で、薬学部は柏の葉だったと思います。この二つを、そのころ学生服だったので、襟の両側につけてみて、それなりに納得したのを思い出します。市川先生は卒業後、一番ヶ瀬先生の教室で研究生活にはいられました。この時から先生との接触は少しづつですが始まりました。それはまず前期、後期の期末試験に於てです、当時、一番ヶ瀬先生の講義は生化学と衛生化学で、その試験官として一番ヶ瀬先生と一緒に来られ、二人で試験の監督をされました。それも一クラス四十名程のところ、机と机の間を相前後して、休むことなく、いったり来たりで監督されました。そのためかどうかは知りませんが、みんなよく試験の準備には怠りなかったようです。そのころ薬学部は昭和町にあり、現在、付属中学校になっています。グランドが校舎のすぐ後ろにあり、自由に野球やソフトボールができたので、薬学部の専用みたいにしてみんな利用していました。そこでのフリーパッティングで、市川先生がたまたま打っておられたのを見たわけです。それは、今から思えばちょうど王監督が巨人の現役時代にボールをバットの上に乗せて打っていたのと同じ打ち方でした。そのことを後年お会いした時に申し上げたら「そうかなあ。」といっておられました。とにかく、先生はあと一勝で、甲子園だったそうです。

先生はその後、熊本大学薬学部に移られました。私も仕事が熊本担当の時、またお会いする機会がありました。そこでのことですが、申すまでもなくそこは全てといつていいくらい熊薬のジツで、開局しておられる長薬OBの先生方も少なく、静かな存在だったと思います。この中にあって、先生から熊本在住者で長薬の同窓会をしたいということで、お手伝いをさせてもらい、会場名は思い出せませんが、お城の下の坪井川に面したところで開催され、大いに盛り上がったのを覚えております。また話のついでに、焼き鳥屋も話題になり、それも熊薬からそう遠くないところで、水前寺のガード近くで、大きい赤ちようちんがぶら下がっており、安くて、うまいということでした。すぐ会社の同僚といってみました。中はかなり広く、カウンターと座敷があり、そこにはテーブルがありました。時には、先生もここで、研究室の先生や学生さんたちと一緒にプレーンストーミングをして研究の促進を図っておられるのだろうと思いました。味の方は今でもチャンスがあればいってみたいくらいです。

以上、先生との接触を、順を追って、それも側面から一方的に、勝手に書かせて頂きました。このように書いてみて改めて思うことは、先生はすべてに愛情を持って行動されておられたのだと思います。それは野球部が今も元気な姿で存続していること、また本業においては、私が申すまでもなく、先生は病薬の方向性で、病棟薬剤師を生み出され、それ

にともなって院外処方による調剤薬局が増え、ここで働く新たな薬剤師を更に生み出され薬剤師としての仕事に生きがいを与えられました。

合掌

渡辺三明先生につきましてはほとんどが野球部を通じての事です。卒業年度も6年ほど前があり薬学での接觸はありません。それが、卒業後ずいぶん立ってから、私も仕事にかまけていましたので、野球部のことはすっかり忘れていました。そういう時に、ひょっこり長薬野球部同窓会開催の知らせが、世話人・渡辺三明先生できました。場所は大学病院下の「天天有」でした。私は返事を出すのが開催日間際だったのですが、いってみると部屋は3階で、大勢の出席者であふれておりました。この時が先生との最初の接觸でした。先生は初対面にもかかわらず、それも遅れて返事したにもかかわらず、ちゃんと同窓の人の隣りに席を取ってあり、案内してもらいました。やっと雰囲気になれて会場を見回したら、OBの人たち、現役の選手と思われる若々しい顔、それらに混じって女性の大変多いことに気付きました。不思議に思い確かめてみたところ、マネージャーだそうです。それでもマネージャーだったらそんなに人数が必要なわけはないと思い、更に聞いてみると野球部と関係ない人も出席されているということでした。その時は理解できませんでしたが、今になってみると、渡辺先生の熱心な働きかけによるものと思います。このようなわけで、この会は年々発展を遂げ「天天有」では会場が狭くなり、より広い会場に移りました。ちなみに「天天有」の3階は、先日行ってみたら女将さんの画廊っていました。

また、この会は翌日がOBと現役との試合になっており、朝早くから決行されます。こういうわけで試合の結果は前夜のアルコールの量と相関することはありません。試合は二種類行われます。一つは、それぞれの代表または選出された選手によって、もう一つは、そうでなかつた人も交じて行われます。試合は昼前に終わり、終了後みんなが部室の広間に集まり、写真を撮り、皿うどんを食べて解散ということになります。これらのこと全てにわたって、渡辺先生が采配を振るわれました。

こうしてみると渡辺先生は熱心で粘り強く、すべてに気を配り、体をはってみんなを引っ張ってこられたものと思います。まだ早過ぎます、これからです。現実にそんな気がしません。また、私としても奥様を存じ上げているだけに残念でなりません。早く立ち直られることを心からお祈り申し上げます。

合掌

## 両先生と長薬拔天会・広島支部

昭和36年卒業 橋口 信彦

去る平成12年8月19日、長薬同窓会会长西脇金一郎先生、副会長伊予屋偉夫先生を広島に御招きし毎年恒例の広島長薬拔天会を開催しました。まず最初に市川正孝、渡辺三明両先生の御冥福を祈って黙祷を致しました。

市川先生は以前、福山大学薬学部に在籍されていた頃、広島の同窓会には興和新薬岡山営業所に居た永田了一君（S36卒）と一緒に度々来られました。又、平成6年6月には病院診療所勤務薬剤師研修会において、『調剤と情報』という研修会にて、中国、四国地区的勤務薬剤師約500名参加の我々に「院外処方調剤における情報伝達」のタイトルのもとに御講演されました。ちなみに、其の時の座長は、広島市安佐市民病院の沖川正義（昭和41年卒業卒）薬剤部長でした。内容は長崎における医薬分業に対する推進などで、中国地方の薬剤師には大変、参考になりました。同年8月27日広島同窓会に御招きして、会に先立ち「薬剤師職能と将来」と題して講演され内容はコストベネフィットは患者のもの、で会は盛会裏に終わりました。翌日は市川先生、大石照雄（昭和35年卒業卒、マツダ病院）、白松一良（昭和36年卒業卒、三共）、森崎孝幸（昭和45年卒業卒、三共）君が、山口県の宇部C.Cに行かれ、皆、良いスコア出たと後で聞きました。



写真は昭和35年頃の野球部忘年会、会場は不明

次に、渡辺三明先生は平成11年8月21日、広島同窓会に御招きし、会に先立ち長崎大学薬学部の講座、専門教育分野、教授、助教授等を説明され、平成11年3月卒業、修了者の就職、進学状況をお話しになりました。此の頃は製薬会社への就職がぐっと減ったとの事でした。私達が卒業した頃とずいぶん変わったなと思いました。最後に薬学部にホームページを開いたので、本ページをご覧になった感想・ご意見、ご要望をぜひ渡辺三明までお寄せ下さいと紹介されました。懇親会では、同年代の沖川正善、村上剛（昭和43年卒業卒）、品川龍太郎（昭和44年卒業卒）、森崎孝幸君らと特に親しく話されていたのが、今でも思い出せます。

両先生とも仕事半ばにして亡くなられ、さぞ残念だろうと思います。広島支部としましては、大変感謝しています。両先生の御冥福を心よりお祈りいたします。

## 市川先生との思い出

昭和37年卒業 吉田 研次

昨年、会社を定年退職し11月に大阪から長崎（諫早）に帰って来て、はじめて市川先生が入院されていることを知り驚きましたが、そのうち軽快退院されるだろうと軽く考え、退院されたら度々お会いできることを楽しみしておりましたところ、突然、先生の訃報の連絡を受け殊更驚きました。

先生は、私が昭和33年に大学に入学した年に薬学部を卒業され、助手として勤務されておられました。先生に初めてお会いしたのは、私が野球部に入部するきっかけになった時でした。それは、1年の教養の後期、昭和町の薬学部のグランドで高木康先生に捕手をして戴き投球練習をしていた時です。校舎から白衣を着て出てこられて高木先生の後ろから投球をじっと見ておられた方が市川先生（その時は市川先生とは知りませんでした）でした。先生の目に適ったのか、後日高木先生から野球部に入部を進められ入部することになりました。それ以降市川先生に数多くお世話になりますが、特に4年の教室の実験及び卒業後の就職にお世話になることになりました。

教室は、一番ヶ瀬尚先生と市川先生がおられた薬剤学教室に入りました。実験のテーマはクマリンの合成でしたが、一番ヶ瀬先生が10月に熊大薬学部へ移動されましたので、その後を先生1人で私たち学生5人（男性3人、女性2人）が卒業するまで実験及びその実験のレポートの書き方まで丁寧にご指導して下さいました。その時先生は助手として勤務されて4年目とゆう若さで私たちのため人1倍大変苦労されたことを思うと本当に感謝に絶えません。そして私たちの卒業を見届けられてから熊大薬学部へ転勤されました。

卒業後の就職について私が会社（その当時は、各会社の説明会がなくプロパー=MRの仕事は何をする仕事が知らない状態でした）の選択に迷っていた頃、先生に相談したところ快く相談に載って下さり、先生から野球部の先輩である角田正之先輩が就職している塩野義製薬を受けたらどうかと貴重な助言をして下さいました。そして昨年定年退職するまで37年間当会社に勤めるようになりましたが、これも先生と出会いが逢ったからこそと思っております。

今回諫早に定住することになって、これから先生と色々な話いや野球部のOB戦でいっしょにプレーできることを楽しみにしておりましたが、そのようなことが適わなくなり非常に残念なりません。

<写真は36年11月に教室全員で福田の海岸に遊びに行った時のものです>



## 市川正孝先生とタバコ

昭和38年卒業 左利 龍彦

先生に初めてお会いしたのは、教養が終わり昭和町の校舎に移った昭和35年の春でした。当時、先生は生化学教室に所属されていたと記憶しています、小生は野球部の他に庭球部、卓球部に所属しており、校門の脇にあったテニスコートでの練習を先生が生化学教室の窓から見ておられたのを思い出します。先生が昭和37年春に熊本大学へ移られるまでの二年間、昭和町校舎で一緒だったと思うのですが、何だか先生は雲の上の存在でしたので親しくお話をさせて頂いた記憶はありません。しかし野球部の練習では先生のノックの厳しかった事と遊撃手の守備を教えてもらった事は今でも覚えております。昭和36年の九葉連において吉田・平バッテリー(昭和37年卒)で見事に優勝したチームに遊撃手として貢献出来たのも偏に先生のお教えの賜物と思って居ります。九葉連での優勝は小生の長崎での学生生活最大の思い出であり又最大の喜びでもあります。

昭和38年に吉富製薬(現ウェルファイド)に入社し、以後東京、横浜、大阪、広島と転勤を重ね各地の大学病院薬剤部長から先生の噂はよちゅう聞いていましたが、残念ながら担当地区の関係で直接お会いする事は有りませんでした。その間、同社の村野弘和君(昭和54年卒)に何度もOB会に出席する様言わっていましたが、多忙にかまけて出席しなかったのが先生との再会を遅らせる事になりました。

平成5年4月日本たばこ産業に在籍出向する事になり、今度は東京目黒に単身赴任しました。任務は医薬事業部営業の立ち上げでした、平成6年無事立ち上げを果たし初代営業部長として作業を進めている時にある書物で市川先生の名が目に止まりました。先生の留学先の一つでありましたウィスコンシン大でのタバコに関する論文でした、勿論日本たばこ産業に勤務する小生にとってはネガティブデーターでした。困ったなと思うと同時に、早急に先生にお会いして色々お話を伺いしようと思ってた矢先の平成8年7月に3年余りの日本たばこ産業勤務を終えて吉富製薬に復帰しました。ここで又先生との再会が延びる事になります。吉富製薬入社以来何かと相談に乗って頂いていた昭和大学黒岩幸雄教授(昭和30年卒)の退官記念パーティーが平成9年3月に虎ノ門のホテルオーハラだつと思ひますが盛大に挙行されました、この席で念願の市川先生に再会する事が出来ました、今思えば黒岩先生に再会の機会を作つて頂いたと感謝して居ります。学生時代の話、タバコの話等色々話しているうちに一度大学病院へ来なさいと言う事になりました、その後何度も連絡を取りましたが、先生のご多忙さは驚くばかりで二三度アポなしで大学へ押し掛けましたがお会いすることは出来ませんでした。結局、黒岩先生の退官記念パーティーでお会いしたのが最後になりました。唯々残念でなりません。市川先生のご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

## 市川・渡辺両先生を偲んで

昭和39年卒業 山本 浩三

お二人の訃報に接し、世の無常を強く感じています。長崎を離れてから毎年恒例のOB対現役の親睦試合に案内を頂きながら一度も応えていません、長崎のことも忘れかけている自分に、野球部同窓会から突然の原稿依頼を受けて戸惑っています。わずかな記憶を頼りに以下の拙文をお送りすることでご容赦願います。

市川先生は6年先輩で、花の33年組の名選手とお聞きしていますが、直接お話する機会はなかったように思います。私が3年生の頃だったと記憶していますが、グランドで練習中にバッティング投手をしていた時、当時薬剤学教室におられた先生が見ておられて、もう少し腕が上から出て身体が開かなかったらもっと良い球が投げられる、と側の人に話しておられるのが聞こえてきたことを覚えています。身体が早く開く悪い癖はその後も直りませんでした。その後先生は熊本へ行かれ、お目にかかる事はありませんでした。先生の思い出は、野球よりも医薬分業のことで強くあります。長崎大学病院の薬剤部長に就任された頃からしばしば雑誌で、医薬分業の魁として紹介されているのを目りました。今でこそ分業はかなり進んで来ましたが、いち早く分業を推進されたすばらしい先輩がおられることを心強く思ったものです。私も現在高槻市内の薬局で調剤と服薬指導の仕事を少し手伝っていて、医薬分業と言えば市川先生のことがすぐ思い浮かびます。

渡辺三明君とは数年間一緒にプレイしました。私が3年先輩に当たりますが、研究生と大学院との3年間、私はコーチ役のような形で彼らの練習にも出来るだけ参加しました。当時のチームには高宮君という剛球投手がいて、私はよく彼の球を受けました。今も時々左手親指の付け根が痛むのは彼の荒れ球を捕球したせいです。その彼も早世し残念でなりません。三明君は確かに内野を守つていてチームのまとめ役でした。後輩にも良く声をかけ適切なアドバイスをしていました。彼が卒業した年、私も田辺製薬の大坂研究所へ帰り、彼は大学に残りました。その後一度会っただけで年月が経過しました。平成7年の秋、小井田先生と中牟田先生のおられる摂南大学で関西在住の野球部OBが集まって親睦試合をしようということになり、三明君がはるばる長崎から来るというので、彼を慕つて後輩が多数集まりました。彼がずっと長薬野球部を支えてきたことを、そのことから知りました。残念ながら私は野球の試合には参加出来ず、夜の懇親会にだけ出席したのですが、その日の試合は三明君が好投し、そのことを彼がうれしそうに話してくれたのでした。ああ、彼も野球少年そのままだなと思いました。その後も毎年この会は続いていますが、失礼ばかりしていて、二度と彼に会えないままになったことは痛恨の極みです。

私も40歳まで会社の連中とチームを作り、高槻市の大会に監督兼捕手で出場していました。その後体調を崩し今ではボールを握ることはできませんが、野球への思いは強く、少年時代に三角ベースで日が暮れるまで遊んだことが忘れない野球少年の一人です。お二人のご冥福をお祈りするとともに、来世でもまた一緒に野球が出来るといいなあ、その時は甲子園球場がいいかなと思っています。

合掌。



平成8年 OB戦の渡辺三明先生



平成3年のOB戦 練習試合前のあいさつで（トレードマーク？の緑も見えます）



## 三明先生と野球と私

昭和45年卒業 加嶋 憲一

それは薬学部がまだ昭和町にあったころのことです。入学まもなく（S.41, 4月）全学のオリエンテーションに続き薬学部のオリエンテーションが薬学部で開催されました。私は野球が大好きなので、大学では必ず野球をすると決めておりました。しかし、全学の野球部に入るか薬学部の野球部に入るか迷っておりました。オリエンテーション後、薬学部内の食堂で昼ご飯を食べていたところ、なつかしい関西弁が私の耳に入ってきたのです。大阪から長崎へ一人でやってきた私は、少しホームシックにかかっていたので、とてもなつかしくついその人に声をかけました。すると、「えー、あんた大阪なん、俺京都出身や、それでもうクラブ決めたんか。まだやったら野球部に入ってよ、午後から練習あるから見学において」が三明さんとの最初の出会いがありました。

当然三明さんのペースで即日入部決定がありました。我々がお世話になったのは三明さんが4回生から院生の頃되었습니다。練習をつけてくれるのですが、そのコーチングは研究者の割に理論的でなく、かといって根性一本やりでもなく、どちらかというとブタもおだてりや木に登る的な指導がありました。そのせいか成績は別として、チームのまとまりは良かったように思います。マナーに関してもどちらかというと厳しくしつけるのではなく、自分自身が範を示し実践されていました。先輩に対しての礼は尽くされても、後輩の我々にはそれを強要されず、逆に厚い愛情を示して下さいました。それゆえに皆様からずっと変わらず、三明さんの愛称で呼ばれているでしょう。

またこんなこともあります。今度は私が主将で先生が監督の時でした。部員が20名に近くなったときのことです（入学定員数が40から80名に増加のため）。これまで部員数が10名を少し越える程度だったので、試合には全員出場できただのですが、そうはいかなくなっていました。そこで、私は学年無視の実力本位でレギュラメンバーナーを決定する方針を打ち出し、監督の了承も得ました。しかし、これは部内に大きな波紋を呼び、ぎくしゃくした空気を生んでしまいました。私はなす術もなかったのですが、先生はこの修復にものすごく努力され、また補欠メンバーに対する気遣いは人一倍繊細で細やかなものでした。このような繊細さや、他人のために惜しみない努力をされる先生の行動は野球部に止まらず、各方面において發揮されていたことは、容易に想像ができます。お会いするたびに「いそがしくて大変よ」がくちぐせでした。その内容を聞くといつも自分のことより、



他人のお世話の話が圧倒的に多かったです。このようなたぐいまれな人間好きの性格が過労につながったのではないかでしょうか。私は先生に言いたい「なにをチョンボしてるのですか。許して上げるから早く帰っておいで」。

## 「三明さん」と「PASSION」

昭和51年卒業、院昭和53年修了 青野 真

2月26日の朝、級友の田原君から「渡辺先生が亡くなられた」との連絡があった時は、「嘘だろう、あの元気な三明さんが何で…」と呆然となりました。

三明さん（渡辺先生のことを三明さんとお呼びすることをお許し下さい）とは昨年の夏に、長薬同窓会の四国支部長の選任のことで何度か電話でお話したのが最後になりましたが、四国支部長も決まったので、今年は是非、副会長の三明さんに松山までおいでいただき、久し振りに支部会を開こうと松山在住の連中と話し合っていた矢先のことで、残念でなりません。

三明さんとの想い出は、私の青春そのものであり、長崎での6年間を振り返る時、三明さんなくしては語れません。野球部の先輩・部長として、合成化学教室の先生として、また兄貴分として本当に頼れる存在でした。このことは私だけでなく、三明さんと縁のあった仲間は皆、そう思っていたのではないでしょうか。

忘れられない薬学部の研修旅行も三明さんが中心となって進められたと後で聞き、なるほどと納得いたしました。あれだけの規模の行事を企画し、実行にこぎつけるには並々ならぬ御苦労があったのではないかと思います。

また、教室旅行も印象に残る想い出です。合成化学教室はお金を使わず体を使って自然と親しもうと、祖母山や九重等の山々に出かけました。今、当時の写真を前にして、この文章を書いていますが、どの写真を見ても三明さんのあの何ともいえないなつかしい顔があります。涙が自然に出てきます。でもこの涙は悲しみだけの涙ではありません。なつかしい、ありがたい感謝の涙もあります。

合成化学教室では、学業を除けば（非常に反省しています）本当に充実した日々を送らせていただきました。夏休みが終わる少し前に、早めに長崎に帰り教室に顔を出すと、茶色のランニングシャツを着た三明さんが「おお、青野、元気！」と声をかけられ、「ああ、長崎に帰ってきたなあ」とホッとした気持ちになったものです。また、教室の実験の合間にねって、本当によくソフトボールや野球をしました。そこで一番ハッスルするのが三明さんでした。投手の時はあの独特な変則サイドスロー、バッターの時はあの独特な首とバットをねかせたフォームで私達学生と真剣に打率を競ったりしました。その姿が今でも目に浮かびます。

三明さんは研究でも遊びでも何をやるにも本当に真剣でした。野球部に入ってすぐの歓迎会か何かの時に、三明さんから「ドクトルジバゴ」の話と「人生とはPASSION（情熱）だ」といった内容の話を聞いたように思います。詳しい内容は忘ましたが、「PASSION」という言葉はいつまでも心に残っていました。長崎を思い出すとき不思議

とこの言葉が心に浮かんできます。

振り返ってみると、三明さんは本当に「PASSION」そのものの人だったなあ。あのタフな行動力の源が「PASSION」だったんだなあと思います。私にとってこの言葉は、三明さんからの贈り物としてこれからも大切に生かしたい。そして三明さんのような本当に充実した人生を歩みたいと思います。

遺された奥様、ご子息様は、さぞ御無念のこととお察しいたしますが、三明さんは私達皆の心の中にしっかりと想い出を残して下さいましたので、どうか、私達にまたいつでもお声をおかけ下さい。

取り留めのない拙い文章となりましたが、お許し下さい。

## 市川先生の思い出、渡辺先生との約束

昭和51年卒業 板倉 忠則

市川先生は私が大学院の学生の時、熊本大学薬学部の助教授だった。私の熊本での学会発表の日、それまでお会いすることがなかったが、野球部の後輩ということで、昼食をご馳走になった。渡辺先生も一緒にいた。学会発表で緊張している私をユーモアのある会話で激励してくださった。学会発表が終わり、フロアを見ると先生が優しそうに微笑んでおられるのが嬉しかった事を憶えている。その後、野球部の同窓会で何回かお会いした。私は卒業後、縁あって島根医科大学病院に勤務した。大学病院在職中に第1回の日米合同薬学大会がハワイで開催された。その時に市川先生とお会いした。先生から松山賢治先生（現武庫川女子薬科大教授）を紹介された。三人で談笑して飲んだことを昨日のように憶えている。先生にはお世話になった。その後も野球部の後輩というだけでお会いすると優しく声を掛けてくださいました。渡辺先生との思い出は多い。私の良き先輩であり、良き兄貴分であった。渡辺先生との出会いがもしかしたら、私の学生時代もだいぶ色あせたものになっていたかもしれない。

沢山の思い出の中で、やはり最後に渡辺先生と会った日の事が今となっては一番心に残る。それは渡辺先生が機器分析の学会で松江に来られた時のこと。その楽しい思い出は薬学部の大渡氏からの電話で始まった。「今度、三明さんと松江に学会で来るから一緒に飲もう」。それは懐かしい電話だった。渡辺先生が島根に来る。一緒に酒が飲める。考えるだけでワクワクした。早速、松江在住の間瀬田先輩（島根県警勤務、S 47年卒、薬化学）に電話した。松江のことだから、場所の設定は間瀬田氏に一任した。長崎大学薬学部に電話し懐かしい渡辺先生の声を拝聴した。先生は「松江は良く分かるから、店に直接行く」とのことだった。奥様の実家が松江だったことを思い出した。

当日、私が大渡氏をホテルに迎えに行き、店に案内した。間瀬田先輩が笑顔で迎えてくれた。まずは三人で乾杯してのどを潤した。しばらくすると、真打登場となった。渡辺先生があの笑顔で「しばらく、しばらく。板倉君、元気だった？。間瀬田さん、元気だった？。」「お久しぶりです。先生もお元気そうでなによりです。」。そうなんだ、渡辺先生は学生時代からいつも優しい笑顔だった。

飲みながら、渡辺先生と二つの約束をした。一つは長崎大学薬学部同窓会の山陰支部の活性化だった。渡辺先生曰く「山陰支部は動きが悪い。二人で活性化しなさい。」さすが同窓会の副会長を感じた。二つ目は合成化学教室の古川先生を囲む会を出雲で開催することであった。これは私が先生に申し入れしたことだった。先生は大変喜んでくれた。色々な話をして、飲んで楽しい一晩だった。私一人出雲市に住んでいるので早めに帰宅した。今日は楽しかった。じゃ来年、先生との約束を実行しようと心に決めた。

長女の大学進学も決まり、渡辺先生との約束を今年は成し遂げようと思っていた矢先の先生のご逝去だった。先生のご逝去から早や半年が過ぎた。その約束は果たされていない。そしてそのことが私の心に重くのしかかっている。

市川先生、渡辺先生お二人のご冥福を心からお祈りいたします。

合掌

### 三明さん・市川先生の想い出（感謝を込めて）

昭和52年卒業、院昭和54年修了 高田 充隆

長崎での学生生活は私の青春そのものです。そして、それは野球部と薬品合成化学教室の想い出です。さらにもう一言付け加えるなら、それらの想い出のすべてが三明さんに繋がっていくのです。昭和48年に入学した私は、当初、特にクラブ活動にもあまり興味がなく、結局1年間はぶらぶらと学生生活を送ることになりました。2回生になろうとしていた昭和49年の春休み、当時の同級生で野球部だった橋口（故人）と北村がちょうど引っ越しをしようとしていた私のところへやってきて、引っ越しを手伝うというので、布団を車に積んでもらったのですが、着いたところが薬学部の集会所で、ちょうど野球部が合宿をしていたところでした。しかたがないので、しばらく集会所に泊まることになったのが野球部に入部したきっかけでした。それまで、友人といえば下宿の友人か、薬学部の同級生というところでしたが、それ以来、まず、野球部の先輩からはじまり、野球部に関係していた先生方など、急に世間が広がっていきました。の中でも三明さんは、先生でもあり、先輩でもあり、また兄のような存在として、私にはなくてはならない存在となっていました。野球部以外で私の大学生活のもう一つの柱となった薬品合成化学教室での3年間の経験、そして古川先生や木下先生との出会いも、三明さんや野球部の先輩なくしてはなかったものです。この薬品合成化学教室での3年間の経験は一見、現在の私の仕事である病院薬剤師という職業にはあまり関わりがないようですが、このときに古川先生はじめ合成化学教室の先生方や先輩から教えられた科学に対する基本的な考え方方が、今役に立っています。これも結局は三明さんとの関わりがあったからこそだと思っています。

三明さんとの想い出として一番心に残っていることは、とにかく三明さんは野球が好きだということです。野球部が野球をするのは当たり前ですが、それ以外にも合成化学教室でも、毎日対戦相手をさがして年間100試合ほどソフトボールをしていたように記憶しています。また、毎年夏になって高校野球が始まると、毎日松山球場まで観戦に行きまし

た。そして、教室でする話はプロ野球の話。毎年長崎で開催されるOB会に出席したいのはやまやまなのですが、関西に住む我々にとってはなかなか難しく、ここ数年は摂南大学の小井田先生や、中牟田君のお世話で、大阪でOB会を開催しておりました。三明さんはこれにも毎年出席して下さり、私ども関西に住む者にとって楽しみのひとつになっておりました。三明さんの訃報を聞いたとき、まさかあの元気な三明さんがという思いでいっぱいでした。長薬野球部を通して、私の人生にさまざまな広がりを与えてくれた三明さんに心より感謝するとともにご冥福を祈り致します。

また、市川先生は私が学生時代には、ちょうど熊本大学におられる時期であり、直接の接点はありませんでした。ただ、九葉連が熊本であった際に、応援に来て頂いたことだけが、思い出されます。ただし、市川先生が同窓会長になられてからは、近畿支部の同窓会に毎年出席頂き、幹事として大変感謝しております。全国各地で開催される支部同窓会に出席することは大変なことと思いますが、副会長であった三明さんとともに同窓会のために尽力されている姿が目に焼き付いております。平成11年6月19日に長薬同窓会総会が大阪で開催された際にお会いしたのが最後になってしまったことが残念でたまりません。心より冥福をお祈り致します。

### 回想 一三明先生を偲んで一

昭和52年卒業、院昭和54年修了 松野 康二

本年二月末、三明先生の突然の訃報に接した時は、晴天の霹靂というか、嘘だろうという思いでした。前年の六月、今私が勤務している大学に来られ、一緒に酒を酌み交わしたばかりでした。その時は、長崎大より九州女子大に赴任されていた柳原先生と三人で長崎の様子やお互いの研究等を肴に話の花が咲き、相変わらずの熱弁を振られておられました。

私は大学四年（昭和51年）の卒業研究時に、同級生7人（男性4人：北村君、高田君、安河内君、大木（笛田）さん、女性3人：田中（入山）さん、大木さん、今泉（三苦）さんと共に、合成化学研究室に入りました。当時の合成は、古川先生、木下先生、三明先生とM1で菅原先輩、青野先輩がおられましたが、私は、三明先生の下で、当時の研究テーマであったイオウイリドに関する研究をお手伝いすることになりました。具体的には、Thiabenzene 1-oxide 誘導体と Acetylenedicarboxylate との反応に関する研究でした。そんな中、反応生成物として予想してない（？）化合物が得られた事がありました。その時三明先生は、私を横において、その物質の構造や生成機構に関する考察を、一研の床にチョークを使って、熱く熱く語られました。横にいた私は、それを聞きながら、先生の研究に対する姿勢と情熱の大きさに圧倒されつつ、深い感銘・感動を受けておりました。この研究結果は、後日 HETEROCYCLRS (Vol.6, No.11, 1781-1788, (1977)) に発表されました。この論文は、私も共同研究者の一人としていただいており、今となっては、三明先生との唯一の共著論文になりました。形見として、大切にしたいと思っています。

その翌年（昭和52年）、三明先生はカナダへ留学されることとなり、院へ進学するこ

とになっていた私に「指導できなくなつて申し訳ないが、がんばれよ。」と言われ旅立されました。二年間の留学を終え帰学された時、私の方は就職していて、すれ違いになりましたが、その後もいろいろな面で御助言頂きました。これからもまだまだ、教えていただくことがたくさんあると思っていましたが、それができなくなり残念な気持ちで一杯です。

三明先生との思い出は、まだまだ数限り無く浮かんできますが、昨年三月に三明先生に私の研究に関連する論文の送付をお願いした時の返事の電子メールを紹介して筆をおきます。やすらかに、お眠りください。

合掌！

《1999-3-19 付の e-mail》

松野康二様

御無沙汰失礼。文献、下の2つは、ありません。直ぐにコピーいたしましたので、送付いたします。合成等、なにかあったら、言ってきて下さい。17日に九州工業大学でセンターの会議があり、行ってきたところです。4月から私の大変親しい友人の榎原隆三先生が九州女子大の栄養学部（？）に行きます。4月に私も当地にいき、産業医科大学にもご挨拶に行く予定にしています。日程未定。4月から、私は研究科委員会のメンバーになり、天然物構造化学の分野名（教室名）にて、コミットすることになりましたが、現状はまったく変わっておりませんで、義務ばかりが増えております。榎原先生とは共同で研究を行っておりました。もちろん、有機化学や合成のみ、私が引き受けおりました。折尾の方に行っても、貴君の助力も借りて、共同でなにかができるれば幸です。またね。

追伸：薬学部は図書館も縮小しています。移転の問題も解決なく、独立専攻科もできましたので、スペースがまったくありません。文献の下2つもすこし、わかりません。

渡辺三明

## 渡辺投手と市川投手の思い出

昭和52年卒業 大木 豊

小学5年生から高校3年生まで柔道一筋でやってきて、高3の長崎県高体連個人重量級で準優勝した。大学生活に慣れて、アルバイトが決まつたら柔道部に入ることに決めていた。高校の先輩からも誘われていた。が、薬学部野球部に入部した。3年生の尾上（現板倉）さんから、家庭教師のアルバイトをすぐに世話してもらったからである。しかも相手は、一つ年下の女の子。礼節を重んじる柔道家として、野球部へのお誘いを断ることができなかった。

当時まだ人気のあった「巨人の星」の登場人物に因んで、長薬の伴宙太として渡辺先生に紹介されたのが、三明先生との最初の出会いであった。

ポジションは当然キャッチャー。男の部員数は九人ぎりぎりだったので、試合にはすぐ出してもらった。何しろ、柔道一筋できたわけだから、当時は野球の事は常識程度も知らなかった。もちろん、キャッチャーとして試合に出るようになったからルールは必死で勉強した。後になって、三明先生から「笠田（そのころの旧姓）、おまえ、ほんま野球知らんかったなー。」とあきれられた。ルールは何とかわかつてきたが、捕球はなかなかうまくならず、バスボールが多かった。ところが、これだけはずいぶん後になって知ったこ

とだが、バスボールとワイルドピッチがあるということ。捕球できないのは全て自分が悪いと思い込んでいたが、今思えばそうでもなかつたような気がする。元々捕球が下手なくせに投手の悪口を言うのは気が引けるが、ワイルドピッチも相当あったと思う。（投手をされた、先輩、同輩、後輩の皆さんごめんなさい）

その点、三明先生の投球は良かった。フリーバッティングではよく投げてもらったが、コントロールが良く、素直な球で打撃練習にあってこいの投球だったと思う。キャッチャーとしては非常に楽だった。他の投手の時のように、「ストライクだけ打つとぞ。」とバッターにアドバイスする必要はなかった。

市川先生の思い出としてすぐ思い出されるのは、なんと言ってもあの真っ赤なユニフォーム姿である。還暦の御祝いに大学病院の野球仲間から贈られたそうで、その姿でO B 対現役の親睦試合にも何度も登板された。赤いユニフォームを着られる前から捕手を勤めさせていただいたが、さすが、高校野球経験者だけあって名投手であった。コントロールばっちり、変化球も良かった。私が受けた投手の中では、先輩、同輩、後輩には悪いけれども、なんと言っても最高の投手であった。

市川先生には、県職員として薬務行政に携わっているときに非常にお世話になった。薬事審議会、薬種商試験委員会等の用事で教授室に訪ねていくときも、野球部の先輩と言うことで仕事がしやすかった。と、こちらで一方的に思っていた。市川先生は、誰とでも同じように接しておられたと思うが、初対面の人などはあの偉大な市川先生と仕事の話をに行くことは、かなりプレッシャーがかかっていたようである。

今年の一月に市川先生が、二月に三明先生が、相次いで亡くなられた。今頃、天国でお二人は、野球の話、薬学の話、お酒の話などをあの素敵なお笑顔で話されているような気がする。ご冥福をお祈りします。

合掌

## 市川先生と渡辺先生の想い出

昭和53年卒業、院昭和55年修了 中牟田 弘道

市川先生とはじめてお会いしたのは、九薬連大会（昭和52年？）が開催された熊本大学薬学部のグランドだったと思う。市川先生は当時熊本大学薬学部の助教授であったが、熊本大学との試合では、我々のベンチ横に腰を下ろし応援していただいた。しかし、我々は先生の期待には応えられず熊大に大敗てしまい、試合途中に先生の姿がベンチより消えてしまったことを鮮明に記憶している。卒業後、同窓会等で先生にお会いするたびに、一度お詫びしなくてはと思っていたが、その機会を失ってしまったことが大変残念である。

渡辺先生には学生時代、実習および野球合宿等で指導していただいたが、思い出は学生時代よりもむしろ卒業後、特に近畿で長薬野球部同窓会を開催したこの5年間位に多い。大阪で就職後、長薬同窓会の近畿支部会に参加しながら何となく物足りなさを感じていた私は、ある時、渡辺先生に「近畿でも野球部同窓会を開催できませんかね」と半分冗談混じりで相談したところ、「いいね、俺も参加するから是非やれよ」と、近畿在住の野球部同窓生の住所録と共に会の開催について貴重な助言をいただいた。また、先生自身も毎回

遠路長崎から参加いただき、試合後の懇親会では長崎の盛りだくさんの情報と同窓生の近況などを先生独特の親しみ深い口調で話され、「野球の試合よりも渡辺先生に会えることが楽しみやね」とて話していた同窓生も少なくないほど会を盛り上げていただいた。おかげで、会を通して多数の同窓生と知り合え、今、近畿で同窓生の有難みを実感している。

市川先生と渡辺先生は長薬野球部同窓会を大切にされその発展に長い間尽力されてきた。昨年大阪で開催された長薬同窓会総会と両先生を囲んだ二次会では、野球部同窓生の輪の広がりとその強さを充分に感じられた。我々は両先生の意志を大切にし、今後も同窓会の発展に務めていかなければならないと思う。

### 渡辺三明先生の想い出

昭和55年卒業、院昭和57年修了 吉田 泰史

今年2月末の突然の渡辺三明先生の訃報がいまだに信じがたく、今でも「よおー」と軽く右手を上げて私達を出迎えて下さるような気がしてなりません。三明先生の想い出はたくさんあって、何から紹介していいかわかりませんが、その、ほんの一部になりますが、これから紹介させていただきます。

私と三明先生との出会いは、私が長薬野球部に入部したその日からで、野球部員として6年間と、大学4年から院の合計3年間は、薬品合成化学教室において直々に、さらに卒業後も今までずっとご指導下さいました。

さて、三明先生の好物と言えば皆さんご存知のビールでして、当時合成の教室では夕方5時をまわるころからよく飲み会なるものが週1回以上のペースで開催されておりました。私も嫌いなほうではありませんので、大学1年生の頃からよく顔を出しておりましたが、ビール片手に、最後は三明先生の熱弁ぶりがなつかしく思えます。学生思いの先生は自分の方から心配されて、将来のこととか、人生観などさまざまなことをアドバイスされました。

もうひとつ好きなものがインスタントコーヒーです。一日に4~5杯は飲まれていたと思います。

一方、学生と遊ぶことも大好きでした。学生が大好きな三明先生は、私達学生とよく麻雀をしました。土曜日の午後（当時は土曜には休日ではありません）私より3学年下の渡田君の下宿の部屋で、夜遅くまでやりました。でも家庭思いの先生ですから徹夜などはありませんでした。それから、当時三明先生は外国留学から戻られたばかりで、口癖がありました。それは「グッドやでー」でした。それから、三明先生と子供さんと私で子子川（海）ヘキス釣りに行ったことも良く覚えています。もうひとつ忘れられないことは、教室旅行で大分・宮崎県境の祖母山登山があります。皆で協力しあってリュックが肩に食い込む重さに耐えながら頂上を目指しました。頂上付近の景色は最高でした。木々は樹氷がびっしりついて、風が吹くとサラサラと音をたて、一面雪景色でした。生まれて初めて見る風景でした。登山の素晴らしさを教えてくれたのも三明先生でした。遊びばかりではありません。勉強の方面でも、私達が大学院に進学したいと知るや、私の苦手の英語読解力

をつけるために、毎日早朝から自分と佐原君のために特訓をしていただきました。こんなところにも学生に対する優しさ、熱血漢を感じました。他にもいろいろありますが、これくらいでとどめようと思います。

渡辺三明生は、今頃は天国で、あの市川正孝先生と大好きなビールを飲み交わしながら、お二人で、お互いに野球談義に尽きることなく楽しめていることでしょう。

お二人のご冥福を心よりお祈り致します。

平成12年9月21日

### 市川先生と渡辺先生を偲んで

昭和57年卒業 中嶋 幹郎

(長崎大学医学部附属病院薬剤部)

2000年を迎えた今年も、もう秋の訪れを感じる季節となりました。市川正孝先生が逝去されはや10ヶ月が、また市川先生をまさに追うような形で渡辺三明先生が急死されはや8ヶ月が過ぎようとしています。私は昭和59年春に大学院修了後、今の職場である長崎大学医学部附属病院薬剤部に就職した関係で、これまでずっとお二人の先生にお世話をになってまいりました。特に、市川先生には15年間にわたり職場の上司としてご指導して頂きました。私が初めて市川先生にお会いしたのは、大学病院の薬剤部に就職してちょうど1年が経った昭和60年の4月、市川先生が薬剤部長教授職に就任された時でした。私は在学中から野球部の大先輩が福山大学薬学部に教授でいらっしゃるということを渡辺先生からお聞きしていましたが、その先輩に直接お目にかかる事はありませんでした。最初に薬剤部で市川先生にお会いした時の印象は「厳しい上司」でした。10年ほど前までは、いまでも毎年初秋に開催されている九州山口国立大学病院薬剤部ソフトボール大会に備えての練習で、市川先生とよくキャッチボールをしましたが（野球部のキャッチボールです）、その時も「厳しいコーチ」と練習をしているような感じでした。しかし、その練習のかいあって、当時4連覇を成し遂げることが出来ました。市川先生はスポーツだけではなくお酒もとてもお好きで、私も独身のころ職場の仲間と一緒に飲みに誘って頂きましたが、そのようなリラックスした場面でも、私の市川先生に対する印象は「厳しい先輩」であったことを思い出します。平成5年4月に医学部の教官職になってからは、長崎大学や長崎県病院薬剤師会の中で教育研究面に関する仕事をする機会が増え、市川先生から直接指示を受けることが多くなりましたが、このような場面での私の市川先生に対する印象は「厳しい教授」でした。市川先生には、夫婦で公私にわたりお世話になることが多かったですが、2人ともこのような厳しい市川先生がとても好きでした。私に対して常に厳しく接して下さったことが市川先生の優しさだったと思っています。また、市川先生は渡辺先生を非常に信頼されておられ、市川先生が主催される学会では、毎回渡辺先生に運営の中心スタッフの一人として参加して頂き、薬剤部を助けて頂いたことを思い出します。私は、渡辺先生が亡くなられた夜も、市川先生を偲ぶ会の打ち合わせのため午後9時ごろまで渡辺先生と一緒しており、帰宅後、午前3時すぎに薬剤部の佐々木均先生から

渡辺先生急死との電話連絡を頂いた時には、本当に驚かされました。今はもう、市川先生、渡辺先生から直接教えを請うことはできませんが、これからは、市川先生、渡辺先生との出会いから私が得た財産を、薬学を志す若い後輩達に、特に長薬野球部の後輩達にしっかりと伝えていきたいと考えています。両先生のご冥福を心からお祈り致します。ありがとうございました。

## 偉大なる両先輩との思い出

昭和59年卒業 宮下 孝志

まさかこの様な原稿を書くような事になるとは誰が考えたでしょうか。未だに両先輩のご不幸が現実の事とは思えずこの原稿を書いています。

市川先生とは、私がまだ福岡で勤務していた時、野球部OB会で年に一度お目にかかるつていました。いつのOB会か定かではありませんが、OB同士の試合で「往年の名投手」市川先生が先発なされ、対する私どもは中島（s 5 7 卒）黒崎（s 5 9 卒）ら強打者を擁して対抗したわけです。なんと日頃ほとんど打てない私も含め連打連打の猛攻にて見事名投手をKOした事がつい昨日のように思い出されます。当時私と中島さんは、三共の同じ職場で同じユニホームを着て目立ったせいもあり、市川先生から「三共は非常に生きがいいな」とお褒めに与り、非常に気さくにお話しいただいたことを記憶しています。市川先生の勇姿をもう目にできないことを思うと寂しい限りです。

市川先生の後を追うように他界された三明さん 昨年の長薬広島支部同窓会にお越し頂き、3次会で、糖尿気味で禁煙された事や、息子さんがホンダに就職され頑張られている様子 大学の今後のあり方等熱く語っていました。あの会が三明さんとの最期になろうとは非常に残念でなりません。もっと三明さんに聞いてもらいたいことがあったのに…

三明さんにはよく鍛えていただきました。夏の合宿での三明さんのノックは恐怖でした、縦に横に「飛べー」とヘトヘトになるまでボールに飛びつきました。ところがはっと気が付くとダイビングキャッチが出来るようになっているのです。その時三明さん「ようがんばった ナイスプレー」の一言、それまでの疲れがすっと引くような感動・感激を味わったものです。また三明さんは、シートバッティングのピッチャーもよくやられていました、強靭な体力の持ち主で、更に絶対弱音を吐かない男というのが三明さんの強烈なイメージとして心に残っています。リーグ戦や九薬連での戦い方でも不甲斐ない負けを喫した時、三明さんからの叱咤激励「男やったら格好良く決めてこい」には、何回も自分達の心を奮い立たせてもらいました。私の考え方やポリシーのベースを教えていただいたのが三明さんだと思います。ですからもう一度私の考え方を三明さんに聞いていただきご指導していただきたかったのです。もう叶わぬ事となりましたが、三明さんならどう考えるか・どうするか自分なりに考え行動していきたいと思います。三明さんとの思いでを語れば尽きることはありませんが、この辺で筆を置きたいと思います。

最後に、市川先生・三明先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。  
安らかにお眠りください。

## ソフトボール

昭和62年卒業 松岡 芳樹

現在も、続いているのか解りませんが、私達の学生時代には、毎年恒例の教室対抗ソフトボール大会が、開かれていました。入学当時、野球部の先輩から「人が足りないから、ソフトボールの試合に出てくれ。」と言われ、何も解らないまま、「ハイ」と答え、同級生と2人、大急ぎでグローブ片手に、グラウンドへ走りました。その時、参加したチームが、当時の合成化学教室で、渡辺先生がピッチャーをされていました。先輩に「お前達は若い（当時18才）から外野を守れ。」と言われ、私がセンター、友人のR君が、ライトの守備につきました。対戦チームも試合の結果も、はっきりとは覚えていませんが、試合の途中の守備での出来事です。ライトに平凡なフライが上がり、センターを守っていた私には、ボールの軌道がよく解る為、ライトを守っているR君に「バック、バック」と何度も大声で呼びました。が、しかし、そのR君は、何を血迷ったか、捕球体制に入ると「オーライ、オーライ」と叫びながら、どんどん、前に突っ込んでいきます。ボールは、はるか頭上を越えていき、私がそのボールを追いかけます。ボールに追いついた時には、もうバッターはホームイン、平凡なライトフライがホームランとなってしまいました。守備が終わり、ベンチに戻ると、R君は先輩から「なんしようとや！もう2度と信用せん！」などと、こっぴどく絞られていきました。そこへ、渡辺先生が近づいて来られ「ドンマイ、ドンマイ。気にするな。次、がんばれよ。」と暖かい言葉をかけられていました。その言葉に、R君も多少ほっとしている様子でした。

それから3年が過ぎ、私は4年生となって、薬化学教室へ進み、渡辺先生がピッチャーの合成化学教室と対戦することになりました。3年生の終わりに、不注意で足を骨折していた私が、先生から偶然にも、レフト前のヒットを放つと「おお、走れるようになったか。よかったなあ。」と笑顔で声をかけて下さいました。その言葉が今も、胸に残っています。

そして、1年が経ち、院へと進んだ年の、野球部OB会の席では、市川先生から「研究室に閉じこもらずに、医療の現場に出てきて、もっと顔の見えるところで仕事をしなさい。」というようなお話をありました。その時、渡辺先生は、苦笑いをしながら頭を搔いておられたようでした。また、市川先生には、卒業してからの大学関連の講演会や勉強会の席で大変お世話になりました。威風堂々とされた先生の講演の様子が、今も思い出されます。

最後になりますが、市川、渡辺両先生のご冥福を心からお祈りいたします。

## 渡辺先生との出会いと別れ

昭和62年卒業、院平成元年修了 池沢 竜平

私が、薬品生物工学助教授の伊藤先生からこの原稿の執筆依頼をいただいた時、ある種の不安が浮かびました。勿論、これは大変光栄なことではありますが、「故人を偲ぶ」というテーマが書けるかどうか不安でしたし、私自身、自他共に認める筆無精でして、締め

切りに間に合わないかもしれないと思ったのです。思わず合成化学同期の誰かにパスした  
いなと思いましたが、同時に渡辺先生の「何事も覚悟を決めんばねー。」という言葉を思  
い出し、在学中にもお世話になりっぱなしだったことも考え、覚悟を決めてこの原稿の執  
筆を始めることにしました。なお、私はキャラ的にしんみりとは書けませんので、渡辺先  
生を私なりに明るく想びたいと思います。

#### ○出会い

まず、私が渡辺先生に初めてお会いしたのは長崎大学 薬学部 に入学後、準硬式野球部  
に入部してしばらくしてからでした。その頃、先生は合成化学教室の助手で野球部顧問と  
いう立場だったと思います。私が教室に挨拶に伺った時の最初の印象は活力があるとい  
うか、とにかく忙しそうに実験をされており、私が「今度、野球部に入部しました池沢です。  
どうぞ宜しくお願ひします。」と言うと先生は、私にジロリと一瞥をくれると「おう、よ  
ろしく」と言って、また忙しそうに実験室に戻られたことを覚えています。ほんの一瞬で  
したが、先生の眼鏡越しのジロリとした顔が非常に印象的な出会いでした。

その後、大学4年時に合成化学教室に入り、渡辺先生にご指導頂くようになって、合点  
がいったのですが、初対面の時は、リチエーション反応の真っ最中で、本当に忙しかった  
のだと分かりました。このリチエーション反応は、渡辺先生がカナダ ウォータルー大学  
のスニーカス教授のもとで学ばれた反応で、空素置換下に無水溶媒中、ドライアイス・ア  
セトンで-78℃に冷却し、ブチルリチウムとジイソプロピルアミンを滴下反応させて LD  
Aを生成させ、(私の時は)引き続きオルトトルアミド(またはバルキーなエステル)誘  
導体にてアニオンを発生させ、これを種々のベンゾイル化合物に求核的に反応させるもの  
で、下準備も含め、これを3つ4つ同時にやると、反応追跡用のTLCチェックや終了後の  
カラム精製作業等で1日があつという間に終わってしまう代物でした。勿論、現在の学  
生諸君には数ある基本的な化学反応の一つかも知れませんが、当時22歳の決して優秀と  
はいえない学生であった私にとっては大変新鮮で且つ興味深いもので、14年経た現在も  
未だに忘れていないのは渡辺先生の熱心なご指導があったからだと思います。

さて、そんな忙しい学生生活を送りながら、恐らくは私を含め渡辺先生に関わられた諸  
先輩方および後輩の方々と共に通すると思われる、日々の研究業務が一段落した後のあれ、  
特に真夏の暑い日にやるあれば本当に楽しかったですねー、たまに焼きソバが付くささや  
かなドリンクパーティー。現在は恐らく禁止になっており、今の学生諸君には想像できな  
いかもしれません、当時は非常におおらかな雰囲気があり、研究業務終了後は教室での  
酒盛りOKだったんです。そして、当時の合成化学教授の古川先生や院生の方々も一緒に  
なって、教室のみんなでワイワイガヤガヤ、それはもう盛り上りました。話題の中心には、いつも渡辺先生がいて、時には面白い話が、時には熱い人生論が展開されていたこと  
を覚えています。

例えば、渡辺先生から「その反応は危ないから、ドラフトの中でやれよ。」と言われた  
ご本人が直接ドラフトの中に入って実験をしていた話を聞き、危なかったのは反応ではな  
く、本人だったという落ちに大変才オウケしたという記憶があります(その方のお名前は  
記憶にありません)。また、当時、野球部主将の同期のT君は、よく渡辺先生と学生らし

からぬ話題で熱心に議論していました。例えば、テーマは「結婚は妥協か否か」。渡辺先  
生は「結婚は自分にとって相手が最高だと思ってするものだ」という立

場、T君は「地球上の全部の女性と巡り会っているわけではないから妥協だ」とする立場  
でした。私は「そんなのどっちだっていいじゃないですか。飲みましょうよ。」と言った  
瞬間に二人から「黙っとれ、おまえは。」と一括される立場のない立場で、その後、二人  
は2時間ぐらい延々と議論していました。勿論、結論は覚えていませんが、今となれば、  
恋愛や結婚は主観ですし、地球上の女性と巡り終えるまでには年寄りになってしまふぜと  
いったところが妥当な線ではないでしょうか。

私は、同期のT君曰く、よせばいいのに大学院に上がりまして、その後2年間またまた  
合成化学教室の皆様にお世話になるわけですが、ある日、渡辺先生から、「ボイスカウ  
ト活動の一貫で五島に行くけどT(先輩)と一緒に来ないか。釣りもできるぞ。」と誘わ  
れました。私は釣り好きでしたし、先輩のTさんも乗り気だったと見えて、即OKの返事を  
し、お手伝いすることとなりました。その日、我々一行は福江に着くと更に高速艇で  
黄島に行き、そこでキャンプ張りの設置作業を手伝いました。一段落して、渡辺先生から  
ニコニコ笑いながら言われた言葉に私は驚きました。正確には覚えていませんが、「今回  
の活動テーマはサバイバル。食い物は、米とカレーだけ。夕食のおかず担当は池沢とT。  
他にも何人か釣りするけど、おまえらが釣れんかったら、おかげないぞ。」といった内容  
だったと思います。熱心に作業しているボイスカウトの少年達を横目に見ながら、この  
初めての島で何の情報も無いプレッシャーのかかる状態に対し、内心「先生、マジかよ。  
釣れなかったらやっぱいじないです。勘弁してくれ。」と恨めしく思いましたが、Tさ  
んは「よっしゃ、池沢行くぞ」と早くもやる気モードに入っており、私もその言葉を聞き、  
これはもう覚悟を決めるしかないと思い、急いで釣り場となりそうな磯をめがけて走って  
いきました。あいにく天候も悪く、曇り空で、今にも雨が降りそうだったと記憶していま  
す。かなり心配でしたが、釣り場に着くと、第1投から、魚が釣れ、投げる度に釣れまく  
りました。幸運にも魚群(フェフキダイ)が集まってきていました。その後は、T  
さんも私もここぞとばかり狂ったように釣りました。結局、フェフキダイとシーラの2種  
類しか釣れませんでしたが、夕食のおかずとしては十分量を釣り上げ、ボイスカウトの  
少年達と渡辺先生に対し面目を保つことができました。無論、渡辺先生は念のため缶詰を  
用意されていたようです。今思えば、渡辺先生にはいい経験をさせてもらったと感謝して  
います。

#### ○別れ

何はともあれ、このようにホットな人柄の渡辺先生のおかげで忙しくも楽しい学生生活  
を過ごすことができ、更に古川先生にお世話になった大学院を卒業後、個人的には社会人  
として12年目になり、1人娘も3歳と手がかかるなくなり、一度、渡辺先生のところへ  
遊びに行こうかと年賀状を見ながら夫婦で話をしていた矢先に突然、先生の訃報が耳に入  
りました。

その日は、偶然、4年間の仕事の区切りの打ち上げの真最中で、だいぶ酔っ払っていた私

は、携帯に掛かってきたS君の電話が、初めは冗談だと思いました。私にはどう考へても、あの元気な、しかもまだ十分にお若い渡辺先生がお亡くなりになったというのが信じられませんでした。少し時間が経って冷静を取り戻し、帰路につくと、あちらこちらに電話をかけ葬儀場を確認し、翌日の朝一の便で私は長崎に飛びました。

長崎に着いても、すぐに渡辺先生に会えるような気がしてなりませんでした。しかし、葬儀場に付くと古川先生を始め、懐かしい顔の方々がおそろいになっており、別れを現実のものとして受け止めざるを得ませんでした。ご焼香の時、渡辺先生のお顔を拝見しました。よく言われていますが、本当に眠っているようで、今にも「よう池沢、元気か」といつて起きてきそうな感じでした。私は、祖母の時も、叔父の時も葬儀で泣いたことが無かつたんですが、この時ばかりは泣けてきてしまいました。もっと早く会いに来ればよかったと。かえすがえすも先生に自分の家族を一度もお見せすることなく、お別れとなってしまったことが残念でなりません。

10月14日に開催される偲ぶ会には、私儀、11月に妻が出産予定の為、出席できませんが、本原稿を寄稿することで、少しでも先生のお人柄をご出席の皆様に偲んで頂ければ幸いです。

2000年9月18日

## 渡辺先生の思い出

昭和62年卒業、院平成元年修了 塚崎 雅雄

本来勉強というものが嫌いな性分であったために、3年間遊び呆けて留年してしまい、それでもなお1年間ぶらぶらしていた私を拾ってくれたのが渡辺先生、古川先生であった。合成教室に入る前の野球部員としての4年間は言うまでもないが、教室に入り先生の下で実験をするようになってから先日亡くなられまで、渡辺先生には本当にお世話になり、また影響を受け続けてきた。情熱的、誠実、リーダーシップ。先生の魅力を表現する言葉をあげればきりがない。合成教室での先生はまさしくそれらの言葉通りで、化学実験、実験後の飲み会、野球、釣り、麻雀など、何をするにしても全力で、私達学生はいつもその熱気にあてられていたような気がする。私が有機合成化学に興味を持ち、深く入り込むこととなったのはそのせいかもしれない。教室で実験を始めた頃、化学の知識をほとんど持ち合わせていなかった私はいつも先生にくだらない質問してばかりしていたが、しかし先生はそれらの質問に対し、呆れることも無く実に辛抱強く答えていただいたことを思い出す。それは私がこの道に入っていく上で、とても幸運であった。その後大学院に進んだが、先生と私はよく日曜日の午後に実験室で一緒になった。そういう時は決まって、先生にいれていただいたコーヒーと一緒に飲みながら研究に関する新しいアイディアについて議論したりしたものだった。今思えば、青二才だった私は渡辺先生に1対1で向き合っていただけたお陰で、遅れ馳せながら化学者を目指す上で必要ないろいろなことを短期間に学ぶことができたのだと思う。

大学院終了後の進路として海外を希望していると切り出す時、私は正直言ってまだ早い

と叱られるのではと心配であった。しかし予想に反して渡辺先生は、私の気持ちを理解していただき、すぐにポスドク時のボスであったカナダの Snieckus 教授に連絡を取ってくださった。そして彼から私を受け入れてもよいという手紙が送られてきたときは、自分のことのように心から喜んでいただいた。後に分かったことであるが、博士号を持たない研究員を受け入れることは普通考えられないことであるのにかかわらず Snieckus 教授が私を受け入れてくれたのは、心から信頼している渡辺先生の紹介であったからだとう。カナダに滞在中、Snieckus 教授から渡辺先生の話を聞く機会がたびたびあったが、そういう時 Snieckus 教授はいつも懐かしい良き日々を思い出すかのように顔に笑みを湛え、如何に渡辺先生が素晴らしい研究者であるかを語ってくれたものだった。

3年前に日本に帰国し今の外資系製薬会社の研究所に勤めるようになってからも、渡辺先生とは e-mail でいつも近況や有機化学についての話をやり取りしていた。雑用でとても忙しいとよく言っていたが、4月から学生が来ることが決まってからは、また学生の実験の面倒を見ることをとても楽しみにされていた。先生からの最後のメールにこう書かれていた。「定年まであと5年。でも最後まで手を抜かずに頑張ろうと思います。」その通り、これまで先生は常に何事にも全力投球で手を抜くことはなかった。これほどまで早く亡くなられたことは私にとって悲しみの何物でもないが、それと同時に一人の人間の生き方、るべき姿を私達に見せていただいたことに心から感謝している。

## 渡辺三明先生の思い出

平成5年卒業、院平成7年修了 山田 正紀

(薬品合成化学教室)

渡辺先生との思い出は数多くありますが、とくに教室での出来事が心に残っているのでそのころのエピソードを綴らせていただきたいと思います。

一言で言うと本当によく怒られました。もともと理解力に乏しかった私は失敗ばかり。「絶対こぼすな！！」と言われた強烈に臭い薬品（1滴落としただけでそのフロアーに激臭が充満する）をピンごと倒したり、リチウムを指先で発火させたり、実験手順は間違える、大事な時に外出している…など数えきれない粗相をさんざんくり返しました。はっきり言って、当時はあまり好感はもたれていないかったといまでも自負しています。失敗はよくするものの、それほど打たれ強くない私は、毎回怒られるうちにかなり落ち込んでいました。

そんなある日、先生は「留学していたころは朝6時からみんな実験をしていた。」というようなことを朝のコーヒーの時間に私に話しました。私は失敗だらけの汚名をはらすため、それからしばらくの間、6時とはいきませんでしたが先生が来る時間（7：40ぐらいだったか？）に教室に通いました。でもそのころから、先生はいつもあまり話してくれなかつた私に、次第に笑顔を見せてくれるようになりました。

それからというもの、毎朝の約1時間のコーヒーを飲みながらの先生のお話は、半分ぐらいは理解困難（話が古すぎる・難しすぎる）でしたが、あの独特な関西弁・長崎弁・英

語をドッキングさせたような（「トリッキーさねー」「レコグナーズするやん」など…）

口調でのしょもない話は次第に、同期の森本らとともに1日の日課となっていました。

大学院も残り半年ぐらいのころだったか、いつものようにコーヒーブレイクをしていると、先生は私に「こいつはある意味あたまがいい。それは、自分があたまが悪いということがよく分かっている。」といいました。嬉しいような、腹立たしいような複雑な気持ちでしたが、妙にその言葉が心に残っています。今考えると、あれが普段あまり褒めない三明先生の褒め方だったのかもしれません。

長崎を離れてもう5年以上経ちますが、卒業してからというもの、よく就職のことなどで職場へ連絡してくれたり、同窓会では最近の長崎の状況ニコニコしながら話をしてくれたり、学生時代怒られてばかりだった私を慕ってくれるのはたいへん嬉しいことでした。

今となっては、あの独特な口調やあの笑顔が大変なつかしくおもいます。

『三明先生、本当におつかれさまでした。そして、ありがとうございました。』

### 渡辺三明先生を偲んで

平成5年卒業、院平成7年修了 松元 幸平

2月26日の朝、友人から電話がありました。

その日の晩麻雀をする約束をしていたのでそのことでかな?と思っていたら、電話から突然渡辺三明先生が亡くなったという信じられない言葉が告げられました。体調を崩しておられるということは聞いていなかったし、昨年OB会でお会いしたときもお元気だったので、何かの間違いかもしれないと思っていたところに、別の友人からの電話で三明先生が亡くなり、今日通夜で、明日告別式があるということでした。

私は昨年4年ぶりに長崎に戻ってきたのですが、昨年グビロ会に出席したとき、知らない方ばかりで一人緊張しているところに、声をかけていただき本当にうれしく非常に気持ちが楽になりました。しかも、もう4年もお会いしていなかったのに、目立つ方ではなかつた私の事をいろいろと覚えていて下さったのには本当にびっくりしたと同時に本当にうれしかったです。

本当に誰にでも、やさしく声をかけてくださる気さくな先生でした。今でも、まだ亡くなられたという実感は無いのですが、今年のOB会に参加したときにいつもいらっしゃった三明先生にお会いできない時に、本当に淋しさを感じるのでしょうか。

心から、三明先生のご冥福をお祈り申し上げます。

### 無題

平成5年卒業、院平成7年修了 森本 仁

文中は呼び慣れた「三明さん」と書かせてもらっています。

「四年生」・・・当時（平成4年）薬品合成化学教室には、古川先生、木下先生、三明さんの3人の教官がいました。自分の担当教官は三明さんに決定したのですが、初日から気合がはいっていたのか非常に話が長かったと少し怖かったです。

「タバコ」・・・数年前から禁煙をしていたけど自分が合成に入った時はヘビースモーカーでした。「マイルドセブンセレクト」の灰色の箱がいつも机の上にありました。あと「ロッテグリーンガム」も必需品でした。



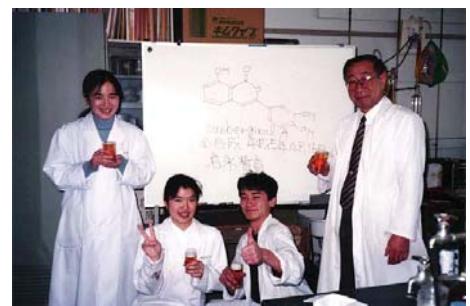
「ビール」・・・酒のなかでも特にビール、特に「バドワイザー」が気に入っていたと思います。ご機嫌に酔っているかどうかは目の角度ですぐわかりました。あと話がさらに長くなりました。といえば実験室の冷蔵庫は薬品とビールで満杯でした。

「野球」・・・「阪神タイガース」ファンでした。タイガース樽酒をうれしそうに見せられた記憶があります。高校野球も好きでした。

「薬学野球」・・・三明さんのノックは結構きつかったです。（練習が終わってくつろいでいるときにフラッと来てすることが多かった）OBから現役までのまとめ役だったので何か会合があるときは嫌な顔せずに率先して働いてくれました。学内でも積極的に学生に声をかけてくれていました。

「歌」・・・カラオケ大好きでした。一緒に飲みに行くと必ずマイクを離しませんでした。一度三明さんに「森本、踊れ」と言われ生まれて初めて女性と踊りました。（店のママさんと）三明さんの歌にあわせて踊るのはいいのだけれど何と歌が5番まであって何で長い歌を歌うのだと少し泣きそうでした。

「合成」・・・三明さんは長年、抗生物質の全合成をメインに研究をしていて（他多数の薬の合成も研究、いくつか全合成にも成功している）自分も3年間一緒に実験してきました。納得のいくデータがとれるまで実験する三明さんだったので量も半端ではなく、厳しい時もありました。一度だけ実験方法だったかNMRの解析についてだったか激しい口論になったことがあります。結局どっちも譲らなかった記憶があ



ります。在学中に全合成は成功しませんでしたが、何年かかっても三明さんが完成してくれる信じていたので非常に残念です。

「学会」・・・何度か学会を一緒に行つたけど石川県の時は一番おもしろかったです。石川県の学会数週間前に全合成に成功した抗アレルギー剤（当時四年生の女の子による）が他の大学のポスターで発表されていた時はさすがに2人で呆然としました。（三明さんは俺達のほうの収率がいいとツツツツ言っていた）2人でガッカリはしたけど、その夜の海の見える露天風呂は最高のながめでした。よほど気に入ったのか三明さんが突然明日もう一泊しようと言ったときは本当にやるなと思いました。おかげで次の日の講義さぼっちゃいました。

「卒業」・・・自分が卒業後は研究室を三階に移し、そこで精力的に実験をされました。何回か遊びに行ったけど在学中と変わらず資料とデータにうもれながら実験している姿を覚えています。家が近いこともあって年に数回程度しか会わないようになり、いつでも会えるだろうと思っていたので卒業したらゆっくり飲みにいこうと言っていた約束を果たせなくなったのが悔やまれます。



厳しい世間のなかハイレベルな薬剤師育成のため、より高度な専門知識を身につけさせようと大学は少しずつかわってきました。当然、勉強や研究の場であって遊ぶところではありません。でもただそれだけというのも何か物足りない感じがして今の大学は少しつまらなくなつたような感じがします。学校のなかでも訪れる場所がだんだん減ってきて、同窓会や同窓会報でしか自分はOBなのだと確認ができないようになってきました。そう考えると三明さんはとてもなく大きな存在だったと思います。

## 渡邊先生との思い出

平成5年卒業、院平成7年修了 千代丸 康重

薬学部に入学してすぐ、新入生の歓迎会のようなものがあり、そこでは、盛んに先輩方が各クラブの勧誘をしていました。私はもともと野球が大の苦手で当時、セバ両リーグの名前は全部はいえませんでした。そんな私ではあったのですが、先輩方の巧みな（？）話術で「とりあえず三明先生のところで話だけでも」ということになって、合成の教室に同期の小浦君と一緒に連れていかれました。渡邊先生とはこの時初めて会いました。この時、何故か鶴屋君は先に来ていて、真っ赤な顔で一杯やっていました。渡邊先生に「おう、ようきたな。まあ、座れ」といわれて、その後何をしゃべったか、今となっては、もう、思い出せませんが、帰りしなには野球部に入部することになっていたことだけは確かでした。

先にも書きましたが私は本当に野球が苦手で、でも何故かピッチャーをすることになり、練習をしていました。そこへ、渡邊先生がやってきて、「振りかぶって投げてみい」と言われ、セットポジションから振りかぶって投げてひどく笑われたことを思い出します。また、ノックをしてもらっている時に、あんまり厳しいので、グローブをグラウンドの外へ投げて「取って来まーす」とか言って、逃げたこともあります。今考えるととんでもないことをしていたものだと思いました。

野球部では飲み会の回数も結構ありましたが、その中で何回となく、一緒に酒を飲む機会もありました。今思い返して特に印象的のは、新入生歓迎コンパの時に（一次会はいつも集会所でしたが）新入生は当然ですが、先輩の方々なども自己紹介などをやりまして、そのときに「こいつはこんなんやからのう」とか、OBの方で「こんな奴がおってのう」などといったことを三明先生がお話されているのを聞いているときに、本当に愛情を持ってその人たちのことを話していたことがいまでも思い出されます。

学生の時分にはよくわかりませんでしたが、子供もできて一児の父となり、社会人として少しばかりの経験を経てみると、あのよう人にとつながりを持てるということは本当にすばらしいことだなあと思います。きっとこれからも、野球部を、卒業生を見守っていてくれることでしょう！

## 三明先生の思い出

平成6年卒業 小畑 滋

私は4年生になった時、薬品合成化学教室に入りました。ちょうど古川先生が退官されたばかりで、三明先生と木下先生がお二人で大学院生6名と4年生6名を指導されていました。三明先生は第一研究室、木下先生は第三研究室でした。私は第三研究室にいたのですが、先生方の目が届きにくいこともあって、今考えるとずいぶんいいかげんなことをしていました。毎日怒られてばかりだったことを思いだします。三明先生には野球部でもお

世話になりました。先生のノックはとても厳しく、右中間と左中間の間を延々と走らされて吐きそうになったこともあります。九葉連で優勝したらビールかけをする約束もありましたが、結局（予想通り）できずじまいです。他にも教室旅行で温泉に入つてまわったこと、子々川に釣りにいったことなど楽しかったことがたくさん思い出されます。卒業してからも、私は家が近いこともあって時々大学に遊びに行っていましたが、最近はOB会で会うくらいでした。もっと会いに行かなかったことが残念でなりません。

## 医薬品合成化学教室の朝

平成6年卒業、院平成8年修了 吉本 雄祐

医薬品合成化学教室・第2研究室のホープ吉本が9時過ぎにいつものように合成化学教室に出勤すると、既に渡辺三明先生と岩永梅香あたりが第3研究室（別名お茶室）の椅子に鎮座している。無論三明先生は白衣を着用しており、白衣の汚れ具合から既に反応の一仕込みでも終わっている様子だが、梅香は全く実験をする体勢ではない。うまくいけばコーヒーの匂いまでしている。当然のごとく吉本も白衣を着用はするが、実験の前にお茶室に入り込む。ここからいわゆる「医薬品合成化学教室の他愛もない一日」が始まる。

今日の話題は何だ？ どうも朝のワイドショーで三明先生が仕入れたゴシップネタのようだ。どこぞの芸能人がどうだ、やれ政治家がどうの・・・しかし既に集合している学生二人もこの手の話題にはめっぽう強いものだから、話に花が咲き延々と終わりを見ない。この間サーバーのコーヒーのほとんどがなくなる。三明先生がカフェイン中毒だからだ。なお、サーバー1杯でカップ約6杯分であり、先生好みのアメリカンコーヒーである事を付記しておこう。

そしてこの時間帯になるとたいがい出勤てくるのが青井澄子、早田文子である。彼女達ももちろん白衣は着用しない。いやもしも着たとしても実験の仕込み段階に入る体勢には程遠いのだが、三明先生もそれを咎めるわけでもない。実は第2研究室の木下先生はとっくの昔に出勤しているのだが、ほとんどお茶室には顔を出さない。それを良い事に、さらに話題は展開していく。もちろんゴシップネタ以外、たとえば合成化学らしい実験の話にもなるのだが、3つある研究室の共通話題にはなり得ない。ここは協調性のある三明先生と学生の事、結局話題は次第にお好みの方へ逸れていく。しかし、もちろん誰もその流れを止めるものではない。しかもサーバーに3杯目のコーヒーを誰が指示するわけでもなく入れ始める。たまに三明先生の無言または有言のプレッシャーがかかる事もあるが、良い級友を持ったものだ。

この間、既に吉本が出勤して1時間は経過しているだろうか？ そろそろ合成化学教室の秘密兵器・友田麻夜の登場時間である。三明先生からは9時に登校するよう指示されているものだから、いつもすまなさそうに「社長」出勤して来るのが、彼女を排除するほど寂しい教室ではない。ちょっと嫌味を言われるもの、それをものともせず輪に入ってくる。これも三明先生の下に付いた強みだろうか？

ここで三明先生の機嫌は最高潮に達する。お得意の語りが長い事、長い事。自分なりの

うんちくをこれでもかと学生5人に振り撒き、煙草の本数もうなぎ上り。そろそろ実験を開始しなければまずいのではないかと考え始めるのだが、何人よりも先生の勢いを止めることはできない。いつの間にやら最後の合成化学の戦士・小畠滋氏が出勤しているが気に留める者もおらず、結局お昼までこの語らいは続ぐのである。

こうしていつも教室には、出身地の関西とご当地長崎弁の混じった「ちゃんと実験せんばあかんっさね～」という、朝の語らいの長さとは矛盾した声が響いていた。合成化学教室の雰囲気を作っていたのは、紛れもなく渡辺三明先生であった。私を含めた学生が楽しく1年間を過ごせたのも先生のお蔭であったと言っても過言ではない。この度の不幸を聞きつけ、多くの教室卒業生及び野球部出身者が葬儀及び墓前に駆け付けたのがそれを物語っていたと思う。非常に残念な事ではあるが、長崎大学薬学部で三明先生と共に過ごせた時間があった事は、人生の1ページとして忘れ得るものではない。あらためて「ありがとうございました」とお礼を言わせてもらいたい。

## 長薬野球部のお二人

平成7年卒業、院平成9年修了 宗安 正俊

この度の市川、渡辺両先生の訃報は誠に残念な知らせであった。今にして考えても両先生の元気でプレイするユニホーム姿が今年の野球部OB会でも見られるのではと思ってしまう。

市川先生には、学生時代に講義を受けているはずなのだが、恥ずかしいことに正直言つて想い出せない。たまたま体調不良で休学していたのだろうか？ とにかく市川先生と言えば、真っ赤なユニホームを着てピッチャーする姿が想い出される。当時、還暦を迎えた先生に野球部OB会の場で贈られたものだったと記憶している。いつまでたっても現役のプレイヤーであることは、野球をやっている人間には憧れの姿であった。

渡辺先生については、本当に野球好きな人だなと思った。私が入学した当初、野球部入部希望者数人が合成教室に集められた。何事かと思いきや、早速私達の野球経歴の確認から当時野球部の戦歴、今年こそは九葉連大会で勝たなければと熱く語っていた。また、こんな事も想い出す。大会前に早朝練習を行っていると、ひょっこりやって来てバットを握り締め、いきなりノックを始め出した。そう、これこそが恐怖の“三ちゃんノック（？）”であった。内野手は、一箇所に集められ右や左へ振り回されながら、段々前へ引き寄せられ強烈な打球を浴びせられた。外野手もまた、守備範囲に関係なく走り回された。みんなが疲れ果てた様子を見届け、先生は平気な顔で去っていく。あまりにもヘトヘトで、私達は次の一限目の講義は自主休講したものだった（ほんの一部の学生の話である）。練習試合であっても、勝ったときの結果報告をすると本当に喜んで下さったし、野球以外であっても、野球部員のことには特に面倒をみてもらった。個人で言うと、卒業を控えた年になかなか就職先が決まらなかった時、先生に相談すると真剣に話を聞いて頂いた。「どうしても決まらない時は、ちゃんと仕事先を探してやるから」と言ってもらい、本当に安心したものであった。現在の就職先が決まったと知らせると、喜んで先生の部屋にあったウイ

スキーを取り出し、お祝いにと頂いた。卒業後、野球部OB会に出席すると、「明日の試合は出れるのか?」と早速野球の話であった。  
こうして、両先生のことを想いだしてみると本当に野球大好きなお二人であったと思う。  
市川、渡辺両先生のご冥福を心からお祈りする。

### 偉大なる先生方との想い出

平成7年卒業 赤嶺(平井)貴子・桝田 希

私達が思い出す三明先生は、真剣に実験をしている先生はもちろんですが、ほとんどが笑顔の三明先生です。楽しそうに実験をしている先生、お酒を飲んでみんなとにこにこしながら話している先生。先生は本当に皆さん的事や実験が好きなんだなあと、いつも思つていました。

私達が合成化学教室を希望したのは有機化学が好きだった事もありますが、野球部の先輩方を慕って教室に遊びに行くと、三明先生もいつも暖かく迎えてくださった事も大きな理由の1つです。三明先生はいつも一番早く、私達が教室に着く頃には既にモーニングコーヒーが済んでいました。有機化学が好きとは言っても、それまでは机上の勉強ばかりで、実際の合成に関する知識や実験の方法もほとんどわからなかったのですが、先生はいつも親切で丁寧に指導してくださいました。また、薬学祭や山合宿等、実験以外の学部の行事への参加にも理解していただきました。誕生日の人がいる時はケーキやプレゼントを買うためにちょっと外出…のつもりがかなり遅くなったりした事もあります。どきどきしながら研究室に戻ると、反応終了したナスフラスコは既に次の過程に。このように三明先生にはいつも甘えてばかりでした。試験に失敗した時は「次は絶対大丈夫だから。」と励ましてくださいました。私達が大学生活最後の年を楽しく充実した1年間に出来たのは先生が暖かく見守ってくださっていたからだと思います。

卒業してからは、野球部のOB会で先生方と何度かお会いしました。市川先生の偉大さに私達はいつも緊張していたのですが、世代の離れた私達とも常に優しく話をしてくださいました。私達が大学1年生で初めてOB会に出席した時、市川先生が還暦を迎えた野球部から赤いジャージを贈ったのですが、そのジャージを着て野球をする先生の姿を今でも鮮明に思い出す事が出来ます。三明先生とは最後にお会いした昨年のOB会で「今度宮崎に行った時はおいしい地鶏を食べに行こう。」と約束していたので、それが叶えられなかった事がとても残念です。

私達はお二人からたくさんの事を教えていただき、大変感謝しています。尊敬する先生方をこんなに早く失ってしまったことはとても悲しく残念ですが、これからは先生方を見習い、「何をしてるんだ。」と叱られない様に、後悔しない人生を送っていきたいと思います。

最後に市川先生、渡辺先生のご冥福をお祈り致します。

### 師匠

平成7年卒業 日宇 宏之

私にとって市川先生と渡辺先生は師匠です。私は学生時には野球部、薬品合成化学教室に所属し、卒業後は研修生として大学病院薬剤部で勉強させて頂きました。進路についてアドバイスを受けたり、飲みに連れて行って頂いたりと、先生方には大変御世話になりました。そして、そんなに御世話になった私ですが、一度だけ渡辺先生とけんかをしたことがあります。合成の教室で飲んだ時です。ちょっとした意見の違ひだったので、お酒がはいっていたこともあり、「頼まれてもおまえの仲人なんかせんぞ。」「先生なんかに絶対頼まんから別にいい。」(今思い出すと恐ろしいのですが)と、お互いにかなり熱くなったりそのまま言い合ってその日は別れました。しかし、次の日酔いも醒めて反省し勇気を出して先生に、「昨日はすみませんでした。意見は変わりませんが、先生に失礼なことを言ったことを謝ります。」と言いに行くと、先生は「ええで、ええで。」と、あの笑顔で許してくれました。私は渡辺先生に、人に素直に謝ることと、それを受け入れる寛容の大切さを教わりました。(実験で習ったこともたくさんあると思うのですが、よく覚えていません。先生、ごめんなさい。)

卒業後の大学病院での研修中に、私は医師になりたいと思うようになりました。そのころ、市川先生から自分の研究室に来てみないかというありがたいお話をあったのですが、再受験の話を先生にすると、「君が思うようになさい。思いっきり挑戦しなさい。」と言って頂きました。市川先生は私にとっては雲の上の存在で、その先生から、「頑張りなさい。」と握手してもらったことは、非常に励みになりました。その後なんとか医学部に入れましたが、途中諦めそうになったとき、何度も薬剤部部長室での市川先生との会話を思い出し踏ん張ることができました。

本当に先生方には、数え切れないほど御世話になりました。まだまだ御世話になる予定だったのですが残念です。しかし、これからも師匠の暖かさと教えを忘れず日々精進していきたいと思います。

### 三明先生、市川先生を偲んで

平成8年卒業、院平成10年修了 坂本 明夏

三明先生の突然の訃報を聞いた時は、かなりのショックでした。その頃、市川先生に統いて、お薬を取りに来られていた患者さんや友人のお父様が亡くなり、「三明先生まで…」という思いが強かったです。

ちょうど長崎を離れていて、お通夜、告別式にも参列できず、大変残念でなりませんでした。

大学院修了後はほとんどお会いすることありませんでしたがニコニコされたお顔しか思い出せないので、ほんとに信じられないのです。

三明先生との最初の出逢いは三年生時の実習講義ではなかったかと思います。薬学部に進学しているながら合成系が苦手で興味のなかった私は、その講義もボーッとして聞いていたように思います。それなのに教壇に立って講義をされる三明先生の姿を妙に覚えています。顔をふりながら話す、という、もしかしたら私しか気付いていない癖が何だか印象的だったのです。野球部OBと知ってからも、学校でお見掛けすると、「あっ、顔をふりながら話すMRIの先生だ」と内心思っていたのでした。

その後四年生に進級してからも、ほとんどお話しする機会はありませんでした。大学院二年生の追いコンの時が私が今までで一番たくさんお話をした機会だと思います。ちょうどその頃、私は急きょ他県への就職をやめ、長崎で薬剤師をすることに決めた時期でした。何気なく、みんなと「長崎で仕事を探さないよねー」などと話していると、三明先生が、薬剤師の仕事をしないか、と声をかけて下さったのです。DIか何かの仕事だったと思います。「せっかく院までいっているし、いい仕事だと思うゾ」と勧めて下さったのです。全く考えていなかつた方向に進路変更することになった私は、かなり戸惑い、不安だったし、やる気も失いつつあったのですが、三明先生がそうやって声をかけて下さり、「長崎でも大丈夫かな」ととても励みになり、ほんとにその時は嬉しく思ったのを覚えています。いろいろと考え、結局は薬局薬剤師の仕事を選びましたが、私にとってはとても印象深い出来事でしたので、先生の訃報を聞いた時は、真先にこのことが思い浮かびました。

市川先生も、お見かけするときはいつもお元気そうで、ご病気のことも全く知らずにいたので、とても頑張っておられた姿からは、こんなに早く亡くなられるとは想像もしなかつたことでした。

お二人とも、まだお若くしていらして、本当にこれから、というときで残念でなりません。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

## 卒業・就職時お世話になった二人

平成8年卒業 小松 和恵

卒業を間近に控えた大学4年生のころ、私は就職をどうしようと悩んでいました。もともとは薬局への就職を希望していましたが、病院へ就職する人も多かったし、第一、卒業後すぐに就職して、国家試験不合格なんてことにならうどうしよう、と思っていたました。そんな時、大学病院の研修制度のことを知り、これだ！と思いました。薬局就職前に



卒業式

病院の薬剤師というものを見ておけること、薬剤師免許が取れなくても、実習生として受け入れてくれる事、この2点が決め手となりました。実習を行った先輩に聞くと、三明先生が市川先生と仲が良いから知っているだろうとの事。それまでは挨拶を交わす程度だった三明先生の所へ図々しくもお願いに行きました。まだ研修生の募集もされてない頃でしたが、三明先生はにこやかに「明日にも市川先生と会うから、聞いてくよ。一応名前と住所と書いといて」と言って下さいました。私の大学病院研修がその後トントン拍子に決まったことは言うまでもありません。

研修期間中は市川先生に大変お世話になりました。研修が始まり3ヶ月が過ぎた頃、いつものように調剤室で研修していると、突然市川先生から教授室まで来て、と呼ばれました。私は（何事！？）と不安になりながら教授室へついて行きました。そこには高木先生（そのときはどういう方なのか知りませんでした）が座っていました。

市川先生「小松さんは薬局希望だったよね」

小松「はい」

市川先生「こちらは長崎市薬剤師会会长の高木くん、高木くんに小松さんの就職をお願いしようと思うんだが・・・」

小松「あ、はい、よろしくお願ひします」

高木先生「実は僕のところも募集中なんだ」

小松「え、あ、はい、よろしくお願ひします」

そんなやり取りがあり、私の就職先は無事滑石薬局と決まったのでした。

市川先生のおかげで今現在も滑石薬局でお世話になり、早4年が過ぎました。就職してからも何回か市川先生とはお会いしましたが、いつも笑顔で「がんばっているね？」と声をかけていただいていました。今でも市川先生は大学病院に、三明先生は薬学部に行けば、あの笑顔に会えるような気がしてなりません。市川正孝、渡辺三明両先生には、卒業、就職の時期に大変お世話になりました。本当にありがとうございました。

## 渡辺三明先生を偲んで

平成9年卒業、院平成11年修了 中田 一成

世の中がミレニアムに沸く中、我々長薬野球部にとっては、悲しい出来事が駆け巡った。私が、市川正孝先生、渡辺三明先生が相次いで亡くなられるという訃報を聞くのは、長崎を遠く離れた東北の地のことであった。

私は今、仙台にいる。そこから二時間以上離れた気仙沼という地が、私の働き場所である。その往復の道中、時に両先生のお顔が思い出される。市川先生は、我々平成入学世代の部員にとっては、雲の上の先輩。渡辺先生は、同じ校舎にいる身近な先輩として、指導をいただき、大変に影響を受けたものである。その身近な先輩、渡辺先生、以下呼びなれた三明先生（さんめい先生）と時に呼ばせていただきながら、思い出を綴ろうと思う。

三明先生との出会いは、私が長崎大学薬学部に入学し、同野球部に入部した時のこと

あるから、平成5年の春ということになる。当時、薬品合成教室におられた三明先生のもとに、恒例となっていた“新入部員の挨拶”と、先輩に連れられ、同期の仲間と行った時のことであった。三明先生から、学生生活について、野球部についてお話しがあった後、初めて言葉を交わした。独特の抑揚のある口調での、「中田君、君はなんで長崎へ来たんや？」の問い合わせに対し、「はい。新幹線で参りました。」という私達前後の代の部員にとっては、あまりに有名なエピソードから始まる。（「岐阜県出身の君が、なんでこんな遠くへ？」というのが、三明先生の真意であったのだが。）

しかし、まだこの時は、渡辺先生であった。それが、三明（さんめい）先生となるのは、その数ヶ月後のことになる。三交戦を目標に、練習に励んでいたある夏の日の朝、小林先輩が、「さんめい先生にあった。ノックしに来ると言うから、覚悟せなあかんぞ。」と言われた。「どの先生ですか？」との私の問い合わせに対し、「知らんのか。野球部の先生やないか。」と。そこで、「ああ、なるほど、野球部の市川先生、渡辺先生、伊藤先生の、三名の先生のことか。三人の先生がノックに来るとは、それは確かに大変なことだぞ。」と、全く見当外れなことを考えていたのを思い出す。後にこの勘違いは、また笑い話となってしまうのだが。

その先輩方も恐れた“さんめいノック”により、我々も四年の春の引退まで、鍛えられた。ショートの守備位置から眺める、外野への三明ノックは、“レフト！レフト！レフト！”と、右へ左へ、前へ後ろへ、と連続でガンガンと、鋭い打球が飛んで行く。私も中継に入りながら、右へ左へ、前へ後ろへ、青春の汗を流した。

こういったノックの後には、恒例の三明評がある。忘れもせぬのが、三交戦を目前にした三年の夏、「お前達なら勝てるかもしれない。」という言葉である。その予言通り、また、特訓に応え、見事に“夏の一勝”を挙げることとなる。平成11年の春には、九葉連優勝、その前後の年も準優勝と、好成績を収める我が長薬野球部だが、当時の一勝にはおよそ十勝分の価値があった。その為に、“勝利報告会”なるものを聞いたものであったが、何より三明先生が目を細くして、首を揺らしながら喜んでくれたのを思い出す。その後、ご多忙となった先生が、“三明ノック”に現れる機会が減り、我々より若い世代には、それは、語り継がれるものとなっていました。そんな中、我々は貴重な時を過ごせたものと、時代に感謝している。

三明先生はまた、人として大切なものを、我々に教えてくれた人でもあった。すなわち、我々は、野球部を愛することから、人を思いやることを学ぶ。このことは、いついかなる時も役立つものと、確信している。そういった先生であったから、進路についても親身になって相談に乗ってくれていた。三明先生にお世話をされた者は、野球部員に限らない。私へもまた、「院卒のMRというのも珍しい。いつものように、思いっきりやってみたらええんや。」と。

その言葉とともに、私は、長崎を送り出され、武田薬品に入社する。大阪での研修の後、仙台に配属となった。三明先生の御子息が東北大学にいらっしゃったこと、また、御子息の奥様の実家が仙台の為、時々訪れる事を聞いた。「そこで立ち寄るのが牛タンの～助、何という店だったかなあ？」と言われていた。「では、次回、先生が来るまでに、一番の店を探しておきます。」と、仙台での再会を約束していたのだが。

今こうして、“先生を偲ぶ”を綴っていると、次から次へと、思い出される事は尽きない。長薬野球部の源泉たる市川正孝先生、またその流れを継承され、我々平成世代へと、さらに託された渡辺三明先生。その両先生のご他界は、あまりに大きい。しかし、ここで先生から受け継いだものをもって考えると、我々は、やはり何時までも悲しんでいてはならない。我々が、両先生から得たものをもって、この世界を、自分の人生を、元気に、幸せに暮らすことが、何よりの供養、両先生が喜んでもらえるものと、思えてならない。

三明先生の私への最初の言葉、「中田君、君はなんで長崎へ来たんや？」の問い合わせに、今ならこう答えたい。「はい、長薬野球部に入る為。そこで、市川先生、三明先生はじめ、素晴らしい先輩、仲間、後輩達に出会い、そこで得たものをもって、素晴らしい人生を過ごす為に参りました。」と。

市川正孝先生、渡辺三明先生、有り難うございました。  
心よりご冥福をお祈りいたします。

## 名ノッカー!!

平成9年卒業 平良 文亨

私が学生の頃、夏休み期間の野球部の練習に、必ず顔を出されてノックなどを中心にご指導賜りました。夏の暑い日に朝から練習をし、更に内野と外野に分かれて守備を中心とした練習を続けようとしたところ、三明先生が来られて「よーし!!やるかっ!」と言。すぐにノックの準備に取り掛かられました。まず最初は内野ノック。私は外野だったので内野の様子を見ていたら、ただでさえ体力のない我が野球部員たちが右へ左へ揺さぶられ、へとへとになっていました。「やばい!」そう思った外野陣は少し体力を残しておこうと思い、軽めのキャッチボールをしながら待機していました。ところが、そんなことを知つてからはずかしい外野ノックが始まると内野以上の激しいノックが開始されました。「はい次一!センター!!」の合図で、私は厳しいところに飛んでくるボールを追いかけ、やっとの思いでボールを手にしたとたん、「はい次一!センター!!」の掛け声。私は耳を疑いましたが、やはりノックの打球はセンターへ。今度は逆方向へひた走りました。そして次は前へ後ろへ。続けざまに飛んでくる三明先生の渾身の打球が、私たち外野陣を襲ってきます。このような激しいノックが繰り返され、外野陣もへとへとになりました。しかし、このノックが夏休み最後に行われる三校戦へのいい刺激になったことを今でも憶えています。今となっては、学生時代のいい思い出になっています。

OB戦での勇姿を見る事ができないことを残念に思います。最後になりましたが、三明先生と市川先生のご冥福をお祈りしてメッセージに代えさせていただきます。

## 私の良き理解者、三明（さんめい）先生

平成9年卒業 林田 壮一郎

「最近どうや！？」「ほうか（そうか）」。

会えば必ずお声を掛けいただき、いつも心配して下さっていた三明（さんめい）先生。昨年のOB会のときにも、一次会の合間に廊下でいろいろなことを話し、また、相談にものっていただきました。それを見た後輩からは、まるで私が三明先生に説教されているみたいだった、と言われる程でした。それが、三明先生と話をした最後となってしまいました。そのわずか数ヵ月後の市川先生の訃報に続く、三明先生の訃報。今でも信じられないというのが私の本当の気持ちです。今度また長崎に会いに行けば、また、満面の笑みで「最近どうや！？」「ほうか、ほうか」といつもの言葉で、私を迎えてくれそうな気がしてなりません。

三明先生、本当にもういらっしゃらないのですか。まだまだ、話したいことや相談にのつていただきたいことが山ほどあるのに…。

私が三明先生に初めてお会いしたのは、今から7年前の春。長崎大学への入学を果たし、薬学部の茶話会での先輩方からの勧誘で野球部への入部が決まり、先輩に連れられて「合流」の研究室に御挨拶に伺ったときが最初でした。緊張している私達新入部員を前に、「どこから来たんだ？、どうして長崎大学に来たんだ？、長崎大学は…」今思えばいつも調子で「三明節（さんめいぶし）」が始まりました。それが「三明節」を聞いた最初でした。聞いたと言うか聞かされたというか…？今でも、その時の光景がしっかりと目に焼き付いています。それからは飲み会があるごとに「三明節」が炸裂していました。失礼な話ですが、今思えば学生当時は、先生を先生と思っていたのかもしれない自分がいたように思います。いつも気さくに私たちに話し掛けていただき、とにかく何でも話し易かったのは事実です。先生と言うよりも何でも話せる先輩であり、私たちの良き理解者であっていただいたと思います。

そして、特に4年生のときには本当にいろいろお世話になりました。その後の進路について悩んでいたとき、同窓会室の大河内さんとともにいろいろと相談にのっていただきました。お忙しいにも関わらず、長い時間私の話に耳を傾け、親身になってアドバイスしていただきました。就職が決まったときには、何とワインを一本プレゼントしていただきました。学生の私にとって、高価な本当のワインを一本手にしたのはそれが初めてで、とても甘く飲み易く、半分くらい一気に空けて、残り半分は野球部の同期の仲間と飲みましたが、その味は一生忘れることは出来ません。最高の味でした。その後、就職してからも時々先生からお電話をいただき、励ましていただきましたし、結婚が決まったときにもとても喜んでいただきました。本当にうれしく感謝しています。

三明先生、本当にもういらっしゃらないのですか。長崎に行ったときにはつい忘れて、先生に会いに行ってしまいそうです。今まで本当にありがとうございました。先生の今までのあなたかいお気持ちに応える為、これから頑張って行きたいと思います。これからは、遠いところから私たちをあたたかく見守っていて下さい。

## 市川・三明両先生に誓って

平成10年卒業、院平成12年修了 目良 国寛

6年間の学生生活も残り3ヶ月という時に両先生の相次ぐ悲報を聞き、驚きと悲しみでいっぱいでした。お二人には入学以来、野球部行事だけでなく進路相談や就職の際にも大変お世話になりました。私の将来を左右した偉大で影響力の強い先生方であったと改めて感じております。卒業式には6年分の御礼をしよう、社会に出て活躍することでお二人に恩返しをしようと考えていた矢先の辛く悲しい出来事でした。

市川先生とは、キャンパスが違うこともあって年に一度のOB会と卒業式後のパーティーでしかゆっくりお話をできませんでした。しかし、国内外で活躍された先生の講義もしくは病院実習でのお話は興味深く、毎回食い入るように聞いていたのを思い出します。それまで私は実家のある壱岐の島で薬剤師として働くと安易に考えていましたし、薬剤師と研究を全く切り離して考えていました。そんな私に先生は、これから病院薬剤師のあり方や薬剤師といえども研究することの大切さを語って下さいました。迷っていた大学院への進学を決意したのも先生のように薬剤師と研究を両立できる男になりたいと強く思うようになったからです。今は薬剤師としてではなく製薬会社の研究員として頑張っていますが、先生との出会い無くて現在の私は無かったでしょうし、何より仕事に対して今ほど情熱を持つことも無かったのではないでしょうか？ 一からのスタートですが、いつか先生を超えるような男になります。市川先生、本当に有り難うございました。

上記のとおり私は現在研究者として働いています。この機会を与えて下さったのが三明先生でした。先生は野球部の新歓の時、私に用意されたコップ（ポカリスエットの500mLの瓶）に真っ先にお酒を注いでくれました。無理するなと言いつつなみなみと。それを飲み干した時点では私はその日敗北者でした。大学での記念すべき一敗目でした。先生はその後も早朝練習や飲み会に参加して下さり、野球部一同をいつも温かい眼差しで見守ってくれました。私に就職面接の話を一番にして頂いたこと、本当に感謝しています。あの時先生と私はある約束を交わしました。「絶対辞めるな。活躍して長薬の後輩が就職する際、力になってやれる先輩になれ」いかにも三明先生らしい一言でしたが、この約束をしっかりと守るために私は頑張っていきます。

市川先生、三明先生、お二人には感謝の気持ちが尽きません。今後の野球部OB会で市川先生の勇姿や三明先生が赤ジャージを着る時を目にすることができないのは残念でなりませんが、私を含め先輩OB、後輩達の全てが両先生に負けないぐらいに長薬を、そして長薬野球部を愛していることを忘れないで下さい。だから安心して私達の未来を温かく、時には叱咤激励して見守っていて下さい。本当に有り難うございました。

## 渡辺三明先生へ感謝の気持ちを込めて

平成13年卒業予定 長谷 彰子  
(元天然物構造化学教室所属)

期間で言えば、私と三明先生との付き合いはとても短いものでした。数字にして、約2～3ヶ月程度のものです。でも、この2～3ヶ月は、私の大学生活を語る上でなくてはならない貴重な時間であったと思っています。

もとはといえば、三明先生との出会いは、私が大学1年生の時、先生が講義された「化学A」を受講したことに始まります。この時は、まだ先生と特に個人的に話をしたことはありませんでしたが、物質の化学構造が解明されていった歴史などについて、熱心に講義されていたことを思い出します。当時の先生を思い出しても、先生の化学への情熱を感じられます。

次に、三明先生と私が、接点を持ったのは、私が大学3年生で、研究室選びに頭を悩ましている時でした。三明先生は、この年新しく「天然物構造化学」という教室をつくられ、学生も受け入れるとのこと、1年生の時の熱い講義を思い出した私は、友達の鷗田さんと一緒に三明先生のところへ話を聞きに行きました。

初めて話をする私達に三明先生はとても好意的でした。まだ部屋も片付かず書類に囲まれていた先生は、私達が来ると嬉しそうにして、椅子のうえに重ねてあった書類をどけて、私達の座るスペースを確保してくださいました。そして、先生の大好きなコーヒーも入れてくださいました。研究室の話に始まって、私達の将来についてまで、色々な方向へ話が広がり、少しだけ話を聞くつもりが、お昼に行ったのに帰りは外が真っ暗になっていたのを思い出します。

一度話を聞きに行った私達は、三明先生の情熱と暖かさの虜になってしまいました。もちろん、三明先生の教室を第1希望に出したことは言うまでもありません。

以後、研究室の一員として教室に通うようになってからは、三明先生と本当によく話をしていた気がします。特に、将来について悩んでいた私は、先生によく話を聞いてもらつては多くの助言を頂きました。この先生の言葉が、私をどれだけ勇気づけたことか。また、三明先生と私達の3人では、よく年間の遊びの計画も立てていました。「ウニを食べに行こう」「イカを食べに行こう」「湯布院に行って、温泉に入ろう」「阿蘇山周辺は、先生の庭みたいなもんやから案内してやるぞ」などなど。あまりにも、沢山したいことがあり過ぎて「遊びのカレンダーをつくらんといかんなー」とまで言っていました。もちろん、研究に関しても、先生はとても情熱的でした。「8月くらいまでになんらかの結果を出して、九州支部会で発表できたらいいなー」とよく私達に言われていました。

三明先生と過ごした日々は本当に夢のようでした。あのまま、三明先生と1年間を共に過ごせたら、、、と思うと残念でなりません。

三明先生、短い間でしたが、本当にお世話になりました。お忙しい中、時間を惜しまず私などの個人的な相談にのって頂きどれだけ救われたことか。本当に、心から感謝しております。有難うございました。

合唱

## 編集後記

長薬野球部部長  
昭和59年卒業 伊藤 潔

平成12年、西暦2000年という節目の年に、長薬野球部のリーダーとして今日の野球部並びに同窓会を築き上げてこられたお二人の先生を失ってしまった。

秋の恒例行事「長薬野球部OB会」。今年もOB会はあるんだとの想いに至ったとき、お二人の先生へ感謝の気持ちを伝える会にしようという考えは即座に浮かんだ。毎年のようにぎりぎりの連絡で行ってきた最近のOB会であったが、先のことは考えずに、まず開催の案内と追悼集への寄稿を呼びかけた。出席の返信はがきは70通を数えたが、原稿の方の集まりは鈍かった。不安がない訳ではなかったが先輩諸氏からの助言と激励もあり、改めて寄稿をお願いした結果、ご覧のように貴重な写真も交えて素晴らしい文章をお寄せいただいた。ご多忙の仕事の中、突然の原稿依頼に時間を割いてご協力してくださった皆様にこの欄を通して感謝申し上げます。ありがとうございました。